

5 . 掲載種の解説

(1) 維管束植物(種子植物・シダ植物)

レッドリストに掲載された各植物について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧、国リストの種についても、これらが目にふれる機会が多いことを考慮し、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説(維管束植物)に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の分類上の位置を示す門、綱、科名等を各頁左上に記述した。科の範囲、名称、配列は「日本の野生植物」(平凡社)に準拠した。科内の配列は、学名のアルファベット順とした。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「植物Ⅰ(維管束植物)レッドリスト」(環境省,2007)の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、「植物Ⅰ(維管束植物)レッドリスト」(環境省,2007)と同様、原則として「日本の野生植物」(平凡社)に準拠した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。評価の基礎になった個体数、集団数、生育環境、人為圧、固有度の階級値も示した。

「国リスト」の種については【除外理由】として、対象種が愛知県では絶滅危惧種と判断されなかった理由を記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。この部分の記述は、特に断っていない限り全国的な資料に基づくものである。

【分布の概要】

対象種の分布状況について、県内・国内・世界での概要を記述した。県内の分布は、1985年以後に生育が確認された区画(6,7頁参照)を略称で示し、区画毎に代表的な標本を1点引用した。引用標本は愛知教育大学標本室に収蔵されているものを優先し、また原則として採集年月日の新しいものを優先したが、標本の状態等を考慮してこの原則によらなかった場合もある。引用は採集者氏名(ただし小林元男氏と芹沢は名を省略)、標本番号、標本の所在(ただし愛知教育大学は表示省略)にとどめたが、その区画内の既知産地で絶滅が確認されたものについては採集地(市町村名はラベルに表記されているもの)と採集年月日を加えた。また、必要に応じて1985年以前に採集された標本はあるがその後生育が確認されていない区画、記録はあるが裏付けとなる標本が確認できない区画を付記した。詳細な分布情報を公表すべきでない判断されたオキナグサとツゲについては、県内を尾張、西三河、東三河の3地域に分けて記述した。

標本の所在は、以下の略号で示した。

- 無表示 : 愛知教育大学 (AICH)
- CPM : 千葉県立中央博物館 ※
- HNSM : 新城市立鳳来寺自然科学博物館
- KYO : 京都大学総合博物館
- MAK : 首都大学東京牧野標本館
- TI : 東京大学総合研究博物館
- TMNH : 豊橋市立自然史博物館
- TNS : 国立科学博物館

※ 千葉県立中央博物館については、収蔵されている故井波一雄氏、稲垣貫一氏採集の標本はほとんど標本番号がないので、同館の維管束植物標本登録番号を併記した。

県内分布図は図示せず、そのかわりに、絶滅種については過去に分布していた区画に対応するすべてのメッシュ(標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ)、それ以外の種については1985年以後に分布が確認されている区画地域(その後の調査で絶滅が確認されている区画を含む)に対

応するすべてのメッシュを「要配慮地区図」として掲載した。詳細な分布情報を示していない種については、尾張、西三河、東三河の3地域に対応する全てのメッシュを淡色で図示した。今となつては配慮のしようがないハマオモト、配慮すべきかどうか判断が困難なヤナギラン、特に配慮を要しないニッケイは、「関連地区図」とした。

【生育地の環境 / 生態的特性】

対象種の生育環境及び生態的特性について記述した。また、横に地形、縦におよその水条件（草・岩は草地・岩崖地等の略）をとった区分図に、主要な生育範囲を示した。岩崖地等の樹林を構成する種は森林、草・岩双方をマークし、湿地林の構成種は湿地のみをマークした。

【現在の生育状況 / 減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生育状況、減少の要因等について記述した。
絶滅種については【過去の生息状況 / 絶滅の要因】として、対象種の愛知県における過去の生育状況、絶滅の主な要因について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

異名、近似種との識別点、和名の語源等、以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に示した。

【関連文献】

対象種の理解の助けになる一般的文献を、著者、発行年、表題、掲載頁、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

多くの種に関連する文献については、以下の略号を用いた。

- 保シダ : 田川基二, 1959. 原色日本羊歯植物図鑑. 保育社, 大阪.
保草Ⅰ : 北村四郎ほか, 1957. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅰ. 保育社, 大阪.
保草Ⅱ : 北村四郎ほか, 1961. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅱ. 保育社, 大阪.
保草Ⅲ : 北村四郎ほか, 1964. 原色日本植物図鑑 草本編Ⅲ. 保育社, 大阪.
保木Ⅰ : 北村四郎ほか, 1971. 原色日本植物図鑑 木本編Ⅰ. 保育社, 大阪.
保木Ⅱ : 北村四郎ほか, 1979. 原色日本植物図鑑 木本編Ⅱ. 保育社, 大阪.
平シダ : 岩槻邦男, 1992. 日本の野生植物 シダ. 平凡社, 東京.
平草Ⅰ : 佐竹義輔ほか, 1982. 日本の野生植物 草本Ⅰ 単子葉類. 平凡社, 東京.
平草Ⅱ : 佐竹義輔ほか, 1982. 日本の野生植物 草本Ⅱ 離弁花類. 平凡社, 東京.
平草Ⅲ : 佐竹義輔ほか, 1981. 日本の野生植物 草本Ⅲ 合弁花類. 平凡社, 東京.
平木Ⅰ : 佐竹義輔ほか, 1989. 日本の野生植物 木本Ⅰ. 平凡社, 東京.
平木Ⅱ : 佐竹義輔ほか, 1989. 日本の野生植物 木本Ⅱ. 平凡社, 東京.
SOS旧版 : 愛知県植物誌調査会, 1996. 植物からの SOS—愛知県の絶滅危惧植物. 同会, 刈谷.
SOS新版 : 愛知県自然史研究連絡会, 2002. 自然からの SOS—レッドデータブックあいち・植物編解説. 愛知みどりの会, 刈谷.
環境庁 : 環境庁(編), 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—植物Ⅰ(維管束植物). 自然環境研究センター, 東京.

【維管束植物 執筆者】

芹沢俊介

【維管束植物 調査協力者】

今回のレッドデータブックは、主として愛知教育大学に保管されている愛知県産維管束植物標本と、その採集者から聞き取った観察情報に基づき作成された。これらの標本は多くの方々の協力によって集積されたもので、愛知県植物誌調査会発足以降に愛知県の自然環境情報蓄積という目的を

持って採集されたもののほか、レッドデータブック作成に使用されることを全く想定せずに採集されたものも多数含まれている。結果的に、この標本集積に協力して下さった方々が調査協力者ということになる。レッドデータブック掲載種であるか否かにかかわらず数点以上の標本を集積して下さった方々は、以下の通りである。

青山正宏	秋山葉子	浅野守彦	新井文子	栗田郁男	飯尾俊介	家田晴俊
石川 敏	石川静雄	石田雄吉	磯貝彰宏	一井尚子	伊藤昭康	伊藤恭子
伊藤静江	伊藤泰輔	伊藤三也	伊奈知子	犬飼 清	井上美保子	岩田妙子
上山秀郎	臼井里華	梅田零奈	遠藤浩三	太田さち子	太田由美子	大谷敏和
大西 博	大原準之助	大宮克美	岡島錦也	岡田 速	岡田善敏	岡田美之
岡本英一	岡本久美子	奥岡啓子	奥村富枝	落合鈴枝	加藤潤子	加藤等次
加藤雅憲	金子律子	壁谷重美子	壁谷祥和	河江喜久代	鬼頭 弘	久納鉦一
畔柳英夫	小林元男	小南藤枝	小林彌壽昭	近藤洋一朗	斎藤雅喜	斎藤道也
榊原利修	佐藤久美子	佐藤徳次	佐分康之	沢井輝男	柴田みゆき	清水常次
白井直子	杉野文昭	鈴木幸子	鈴木 淳	鈴木秀樹	鈴木 学	鈴木万里亜
鈴木美恵子	諏訪 斎	芹沢俊介	高木典雄	高木順夫	瀧崎吉雄	瀧崎吉伸
竹内早一	竹田弘光	竹原芳子	龍川良克	田坪明子	田中郁子	塚本威彦
辻 敬一	恒川敏雄	土場トシ子	鶴岡佐知子	鳥居喜一	鳥居ちゑ子	鳥居栄一
中井三従美	中島ひろみ	中西普佐子	中根幸司	中村さとし	中村裕治	永田晴美
永田芳男	名倉智道	西尾芳徳	西川勇夫	長谷川朋美	畑佐武司	花井隆晃
花岡 昭	浜島育子	浜島繁隆	林 彰一	原田 勉	半田多美子	日比野修
平嶋 敏	広部 栄	深見 弘	福岡義洋	堀田喜久	本多さおり	松井紀枝
松田ちか子	水谷善彌	水野岸子	水野峰子	武藤靖子	村瀬正成	村瀬美智子
村松正雄	山内富士子	山崎玲子	山田茂貴	山田初代	山田 弘	山田果与乃
横井邦子	芳山朋子	渡辺麻子	渡辺幸子			

(五十音順、敬称略)

このほか何人かの方は、点数は少なくとも重要な標本を提供して下さった。それぞれの種について協力いただいた方は、「県内の分布」の項に、標本採集者として示されている。

これらの方々の中で、特に多くの標本を集積して下さったのは小林元男氏である。小林氏は県内で最も植物が多い東三河地方を中心に各地を克明に歩かれ、愛知県における植物調査の中心となつて、多数の愛知県新産種を含む重要資料を採集された。改めて数えてみると、このレッドデータブック作成に用いた資料の半分以上は氏の採集によるものである。現地の状況等も、執筆を担当した芹沢が 1995 年頃から各種会議や標本管理等のために思うように野外を歩けなくなつてしまったこともあって、氏からの伝聞に大きく依存している。また、千葉県立中央博物館の天野誠氏は、本来なら愛知県や名古屋市が責任を持って処理すべき故井波一雄、稲垣貫一氏の標本を精力的に整理され、今回の資料調査に際してもいろいろ御支援下さった。特に記して、深く感謝の意を表する次第である。

オリヅルシダ *Polystichum lepidocaulon* (Hook.) J.Sm.

【選定理由】

日華区系の植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

常緑性の多年生草本。根茎は短く、斜上または直立し、葉を束生する。葉柄は長さ 15~35cm、やや密に圧着するような鱗片をつける。葉身は三角状広披針形~広披針形、単羽状複生、長さ 20~40cm、幅 7~15cm、羽片はほぼ全縁か鋸歯縁、基部は不相称で、前側は耳垂状になる。胞子のう群は羽片中肋の両側に 1~3 列につき、包膜は円形で小さく、早落性である。一部の胞子のう群をつけない葉では、中軸の先が長くのびて、先端に無性芽をつけ、栄養的に繁殖する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊川宝飯（音羽町）で記録されている（植之原，1988）が、ここでは絶滅したという。標本は豊橋市自然史博物館にあるはずで、写真は長谷川（2005）に掲載されているが、未整理らしく整理済標本の中には見あたらなかった。知多南部（南知多町）でも故大原準之助氏が 1977 年に採集されているという（倉田・中池，1979）。しかし、このあたりと伝え聞いた場所では生育を確認できない。本人に直接教えてもらったわけではないので、場所違いの可能性は残されている。

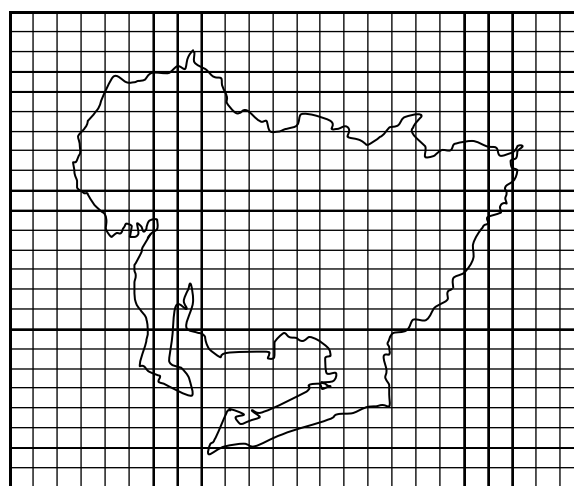
【国内の分布】

本州（関東地方南部以西の主として太平洋側）、四国（太平洋側）、九州、琉球（沖永良部島）に分布するが、千葉県から静岡県までと九州以外では稀である。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、台湾、中国大陸に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

低地の林中や林縁の崖状地に多く、しばしば群落を作る。知多南部の場合、聞いた場所は常緑広葉樹の二次林で、林内に岩が点在していた。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○	○		
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

音羽町のものは、偶産的に 1 株だけ生育していたらしいが、正確なことはよくわからない。南知多町については情報がない。

【保全上の留意点】

潜在的生育地である海岸近くの丘陵地の自然を、全体として保全することが重要である。

【特記事項】

南知多町には同じような環境の場所がたくさんあるので、更に探索する必要がある。和名は、中軸の先端についた無性芽を折鶴に見立てたものである。イノデ属の中ではやや変わった形態を持つ種で、独立属 *Cyrtomidictyum* とされることもある。

【引用文献】

長谷川道明(編), 2005. よみがえれ! 愛知のいきものたち p.81. 豊橋市自然史博物館, 豊橋.
倉田 悟・中池敏之(編), 1979. 日本のシダ植物図鑑 1: 571. 東京大学出版会, 東京.
植之原耕治, 1988. 愛知県音羽町産植物目録予報 p.6. 私刊.

【関連文献】

保シダ p.79、平シダ p.167、SOS 旧版 p.40。

ミヤマシダ *Diplazium sibiricum* (Turcz. ex Kunze) Sa.Kurata var. *glabrum* (Tagawa) Sa.Kurata

【選定理由】

温帯性の植物で、過去に採集された標本はあるが、現存が確認できない。

【形態】

夏緑性の多年生草本。根茎は長くはう。葉柄は長さ 20~30cm、披針形~卵形で黒褐色の鱗片がやや密につく。葉身は広三角形、3回羽状深~全裂し、長さ 20~35cm、幅 25~40cm、草質、羽片は 6~7 対で、下部の羽片には長い柄がある。胞子のう群は裂片の中肋近くにつき、線形、長さ 1~3mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根（茶臼山，芹沢 44532，1986-8-30）に生育していた。

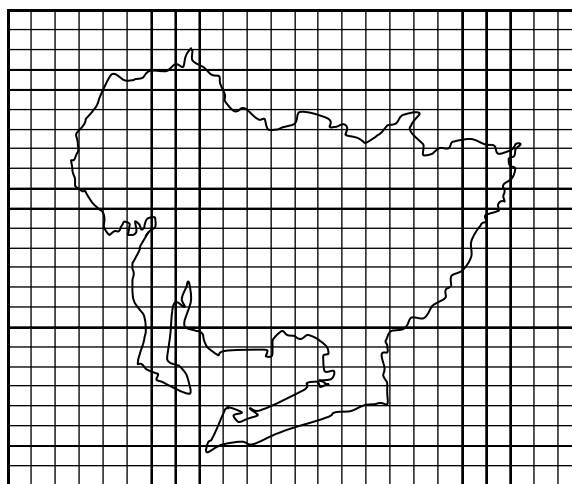
【国内の分布】

北海道、本州（近畿地方以北）、四国（徳島県）に分布する。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島南部。基準変種のキタノミヤマシダ var. *sibiricum* は葉の切れ込みがやや深く、羽軸や小羽軸の裏面に毛があり、包膜の辺縁が細裂するもので、ユーラシア大陸北部に広く分布しているが、日本では少ない。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

温帯域の林床に生育する。愛知県の自生地は、池畔の平坦な林床であった。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

1カ所に小群落があっただけで、もともと発育状態が悪く、胞子のう群もほとんどつけていなかった。スキー場造成に伴う開発によって生育地が破壊され、絶滅した。

【保全上の留意点】

本種とキョタキシダとの自然雑種であるミヤマキョタキシダは、まだ茶臼山に残存しているほか、津具にも生育している。

【特記事項】

ノコギリシダ属としては数少ない、温帯性の種である。矢作川対岸の岐阜県恵那市串原では標高 500m 程度の造林地内に生育しており、今後豊田市稲武地区などのその程度の標高の場所で発見される可能性も残されている。

【関連文献】

保シダ p.128、平シダ p.256、SOS 旧版 p.41。
倉田 悟・中池敏之(編), 1983. 日本のシダ植物図鑑 3: 168-172. 東京大学出版会, 東京.

トサオトギリ *Hypericum tosaense* Makino

【選定理由】

過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。全国的にも極めて希少で、愛知県では分類学的な検討も十分にされないまま絶滅してしまった植物である。

【形態】

多年生草本。茎は2~3本叢生して直立し、高さ15~75cmになる。葉は対生し、長楕円形または長楕円状披針形、長さ1~2cm、幅6~15mm、全面に小明点があり、縁は多少裏面に巻き黒点が並ぶ。花期は8~9月、少数の花からなる花序を茎の先端や上部の枝の先につける。花弁は5枚、ゆがんだ倒卵形で長さ約7~9mm、多数の脈があり、縁に波状歯がある。蒴果は丸みを帯びた円錐形で、長さ約7mmである。愛知県のものはアツミオトギリ *Hypericum momoseanum* Makino var. *atumense* Y.Kimura として区別されることもあるが、ここではトサオトギリと同種という見解に従う。アツミオトギリを独立分類群と見なすならば、アツミオトギリは絶滅変種になる。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美（福江、山本四知夫 s.n., 1939-8-3, TI）で1回採集されただけである。この標本は、アツミオトギリの基準標本である。

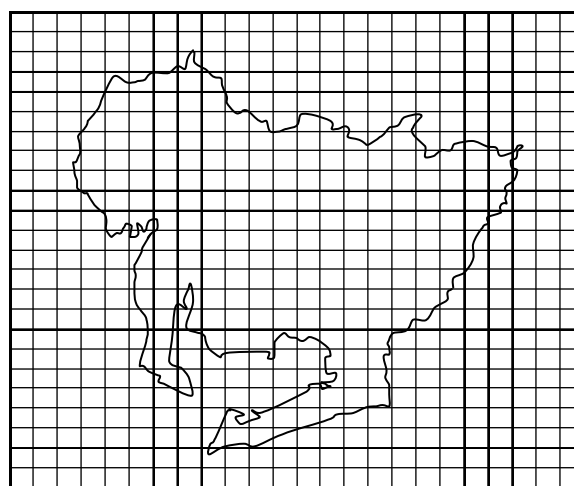
【国内の分布】

本州（中部地方、中国地方）および四国にごく稀に生育する。

【世界の分布】

日本固有種。近縁種の *H. attenuatum* Choisy は、朝鮮半島、中国大陸北部、モンゴル、アムールに分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

蛇紋岩地のような、植生の発達が悪い場所に生育している。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

情報が無い。渥美半島の蛇紋岩地は植生遷移が進行しており、再発見できる可能性は極めて低い。

【保全上の留意点】

本種に関しては、それでも1点の標本が残されている。標本がなければ、あったという事実自体やがてはあいまいになってしまう。生物多様性を論じる上で、確実な標本資料の作成とその公共機関での保存は、是非とも必要なことである。また、愛知県の蛇紋岩地、はんれい岩地は、全体的に森林化が進行している。本種以外の草地性植物を救うためにも、草刈りや火入れを行い、草地状態を維持する必要がある。

【特記事項】

アツミオトギリを区別する場合、識別点としてはがく片が細く狭卵形~披針形であること、花がやや小さいことなどがあげられている。

【関連文献】

保草Ⅱp.66、平草Ⅱp.118（アツミオトギリとして）、SOS旧版p.53（アツミオトギリとして）、環境庁p.112。

タチスズシロソウ *Arabis kawasakiana* Makino

【選定理由】

減少の著しい砂地性海浜植物で、分布域も狭く、愛知県はその東限にあたる。県内では過去の資料はあるが、現存を確認できない。

【形態】

冬型 1 年生草本。茎は直立し、少数の枝を分け、高さ 15~40cm になる。根出葉は倒披針形、先端ほど大きく羽状に浅裂し、鈍頭、長さ 1.5~4.5cm、両面に軟毛がある。茎葉はへら状線形、全縁で毛がない。茎と葉は全体に緑白色を帯びる。花期は 4~5 月、枝の先端に総状花序を伸ばし、白色の花をつける。花弁は 4 枚で倒卵形、長さ 4~8mm である。果実は線形で、長さ 2~4cm になる。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美（小中山海岸、恒川敏雄 s.n., 1946-5-20, TMNH）で採集された標本がある。

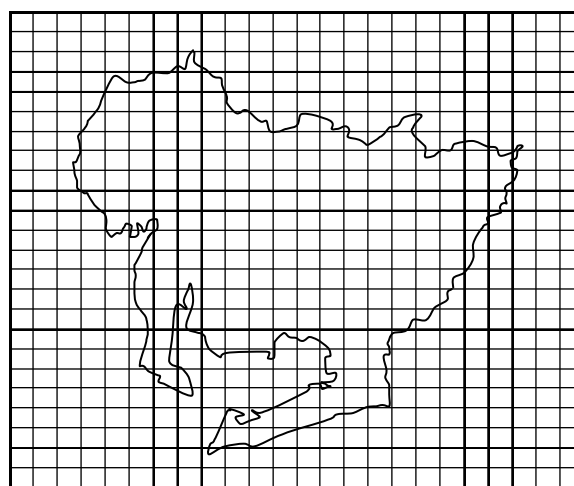
【国内の分布】

本州（東海地方、近畿地方）、四国に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

海岸や湖岸の砂地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				○
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

生育状況に関しては情報が無い。砂防工事の結果砂丘が消滅して、絶滅したものと思われる。

【保全上の留意点】

砂丘ややせ山、湿田のような自然・半自然環境は、そこを利用している、あるいは近傍に住む人に不利益をもたらすため、行政としては今までなるべく消失させるよう努力してきた。しかし、その努力は、一方でそのような環境に住んでいる生物の生活の場を奪い、生物多様性の減少を招いている。住民の利益と生物多様性の保全をどう調和させるかは、今後の重要な課題である。

【特記事項】

山地性のミヤマハタザオ *Arabis lyrata* L. var. *kamtschatica* Fisch. に近縁な種類である。

【関連文献】

保草Ⅱp.181、平草Ⅱp.135、SOS 旧版 p.54+図版 31（写真は三重県産）、環境庁 p.464。

ベンケイソウ *Hylotelephium erythrostictum* (Miq.) H.Ohba

【選定理由】

草地性の多肉植物で、愛知県では1カ所に生育していたが、その場所で絶滅が確認された。

【形態】

多年生草本。茎は直立し、高さ30～100cm、葉とともに淡黄緑色で白色を帯び、しばしば赤紫色の斑点を密生する。葉は互生または対生し、上部の葉は無柄、下部のものは短い柄があり、葉身は楕円状卵形～楕円形、長さ6～10cm、幅2～4cm、先端は鈍頭、基部は鋭形、辺縁には低い鋸歯がある。花期は9～10月、散房状花序を頂生し、紅色の花を半球形に密集してつける。花弁は5枚で楕円状披針形、長さ5～6mm、裂開直前の葯は濃赤紫色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

津具（井口，小林 62426，1997-9-24）に生育していた。

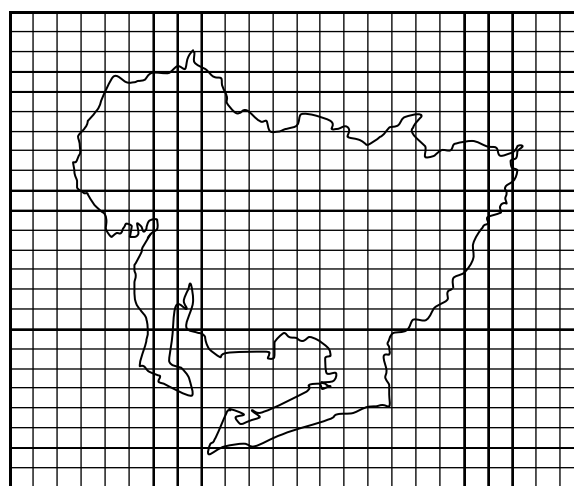
【国内の分布】

本州（中北部）、九州に生育し、また各地で栽培される。

【世界の分布】

日本および中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

草地や明るい林内に生育する。愛知県の生育地は、林道近くの草地であった。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

1カ所に少数個体が生育していたが、生育していた草地が道路の拡幅工事で破壊され、絶滅した。

【保全上の留意点】

アセスメントの対象にならない小規模な工事でも、生物多様性の豊かな場所を改変する場合には事前調査を実施し、必要に応じて対策を講じるべきである。

【特記事項】

Sedum 属とされることも多い。和名は、多肉質でなかなか枯れないことを弁慶の強さに例えたとされる。

【関連文献】

保草Ⅱp.163、平草Ⅱp.151。

ハマビシ *Tribulus terrestris* L.

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい暖地性の海浜植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

1年生または越年生草本。茎は分枝してはい、長さ1mに達する。若い枝には白色の毛がある。葉は2型性、大型の葉は長さ3~6cmで6~7対の小葉があり、小型の葉は長さ1~3cmで3~5対の小葉があり、基本的には大型の葉と小型の葉が対生するが、小型の葉が消失する場合もある。小葉は対生し、長楕円形、大きいものは長さ15mmくらいになり、先端は鈍頭またはやや鋭頭、基部は不等形である。花期は7~10月、花は黄色で、小型の葉の葉腋に、あるいは大型の葉と対生して1個ずつつき、花弁は5枚、長さ5mm程度である。果実は熟して5片にわかれ、直径約1cm、果皮は木質で表面に10本の太い刺と多数の刺状毛がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美（伊良湖岬、高木典雄 s.n., 1970-9-11）で採集された標本がある。

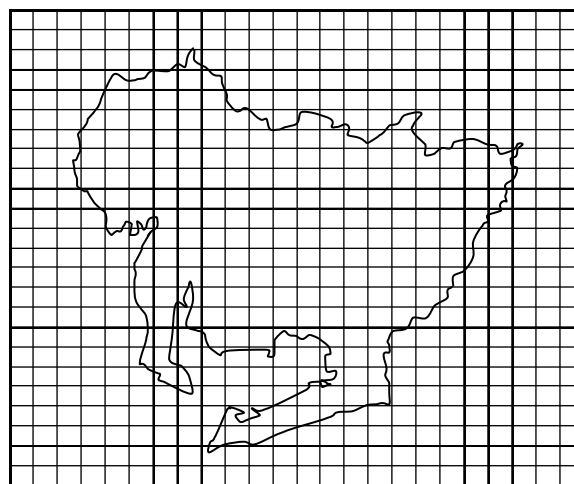
【国内の分布】

本州（千葉県および福井県以西）、四国、九州に生育する。

【世界の分布】

世界の熱帯~暖帯の海岸や内陸の乾燥地に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

日本では海岸の砂地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				○
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

渥美町の三河湾側に生育していたが、火力発電所の建設や砂防工事の進展に伴う砂丘の消失によって絶滅したと思われる。

【保全上の留意点】

砂丘ややせ山のような自然・半自然環境は、近傍に住む人に不利益をもたらすため、行政としては今までのように消失させるよう努力してきた。しかし、その努力は、一方でそのような環境に住んでいる生物の生活の場を奪い、生物多様性の減少を招いている。住民の利益と生物多様性の保全をどう調和させるかは、今後の重要な課題である。

【特記事項】

標本写真は、「植物からのSOS」（SOS旧版）p.61に掲載されている。

【関連文献】

保草本Ⅱp.84、平草本Ⅱp.222、SOS旧版 p.61、環境庁 p.308。

ヒロハツリバナ *Euonymus macropterus* Rupr.

【選定理由】

温帯性の樹木で、愛知県では生育地も個体数も極めて少なかった。過去に生育していた場所を探索したが、現存が確認できない。

【形態】

落葉性の小高木。高さ4～6mになり、若枝は緑色でやや太い。葉は対生し、短い柄があり、葉身は倒卵形～倒卵状楕円形、長さ3～12cm、幅1.5～7cm、先端は急鋭尖頭、基部は円形～くさび形、両面とも無毛、辺縁には細鋸歯がある。花期は6～7月、花序は枝の下方の葉腋から生じて下垂し、長さ3～10cm、集散状に分枝して3～20花をつける。花は淡緑色で直径約6mm、花弁は4枚である。果実は4翼が横に著しく張り出し、翼を含めて幅2～2.5cm、高さ約1cm、種子は赤褐色または黄赤色の仮種皮に包まれる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根（茶臼山，小林 36826，1992-4-29）に生育していた。

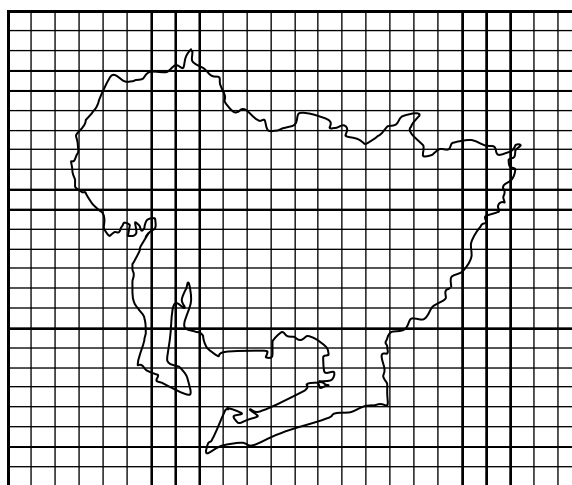
【国内の分布】

北海道、本州（東北～中部地方、近畿地方南部、鳥取県東部）、四国に生育する。長野県まで行けば普通に見られる樹木である。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸東北部、シベリア東部に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の沢沿いの落葉広葉樹林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

落葉広葉樹林内にごく少数の個体が生育していたという。絶滅の原因としては遷移の進行による被陰が考えられるが、詳細は不明である。

【保全上の留意点】

注意して探索すれば、再発見の可能性は残されている。また茶臼山周辺は、愛知県内では温帯性の植物が集中して生育している場所であり、保全上の重要性も高い。自然とのふれあいの場を確保するという意味でも、現在以上の開発を避けるべきである。

【関連文献】

保木本 I p.267、平木本 II p.38。

ハマナツメ *Pariurus ramosissimus* (Lour.) Poir.

【選定理由】

愛知県では幼株が生育していたが、消失し現存を確認できない。定着していたとは言い難いが、雑草的な植物ではなく分布域の北限にもあたるので評価対象に含めた。

【形態】

落葉性の低木。幼樹には托葉の変化した刺がある。若枝は淡褐色の細毛が密生する。葉は互生し、長さ4~6mmの柄があり、葉身は広卵形~卵円形、長さ3~6cm、幅2~4.5cm、先端は鈍頭~円頭、基部はくさび形、辺縁には細かい鈍鋸歯があり、3脈が目立つ。花期は7~9月、花序は枝の上部の葉腋から出て、集散状に数花をつける。花は淡緑色で直径約5mm。果実は半球形で上部に3浅裂する広い翼があり、直径12~18mm、翼の辺縁には細かい歯牙がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原赤羽根（赤羽根町高松，小林 72155, 2001-5-29）に生育していた。

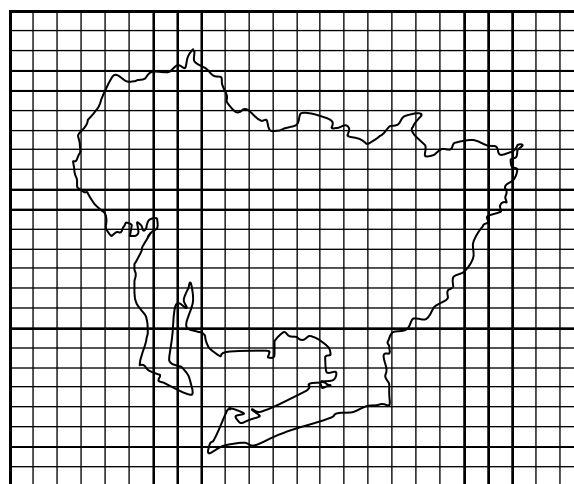
【国内の分布】

本州（東海地方以西）、四国、九州、琉球の沿海地に分布する。

【世界の分布】

日本、台湾、中国大陸、インドシナ。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

海跡湖の周辺などに群落を作ることが多い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				○
湿地				○
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

砂浜の後側にあるテトラポッドの間に幼株が1株あったが、再度訪れた時には消失していたという。

【保全上の留意点】

渥美半島表浜海岸は、池尻川河口が漁港として整備されてしまい、本種の生育に適する場所が失われている。今となつては、小河川河口部などに残存する自然地形をできるだけ保全することが必要である。

【特記事項】

レッドデータブックあいち 2001 植物編原稿作成中に愛知県での生育が確認された植物である。幼木で慎重に同定する必要があったため、今回は掲載を見送った。

【関連文献】

保木本 I p.245, 平木本 II p.54。

ミズスギナ *Rotala hippuris* Makino

【選定理由】

全国的に減少傾向が著しい低地性の水草で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

挺水性の多年生草本。茎の基部ははい、上部は直立して円柱状、下部から枝を分け、高さ3~10cmになる。葉は5~12個輪生し、沈水葉は糸状線形、先端は短く2裂し、長さ2~3cm、水上葉は線形、先端は切形で、長さ0.5~1cm、幅0.6~1mmである。花期は9~10月、花は水面上に伸びた部分の葉腋につき、無柄、白色、がく筒は鐘形で長さ約0.6mmである。蒴果は球形で直径1.5mm、赤色をおびる。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美（江比間，井波一雄 s.n., 1951-11-3, CBM157440）、東海知多（知多市七曲り池，相羽福松 866, 1980-9-23）、春日井（神領町四ツ池，飯尾俊介 25, 1964-9-29）、名古屋北部（田代村猫ヶ洞，森貞次郎 s.n., 1906-9-2, TI）で採集された標本がある。

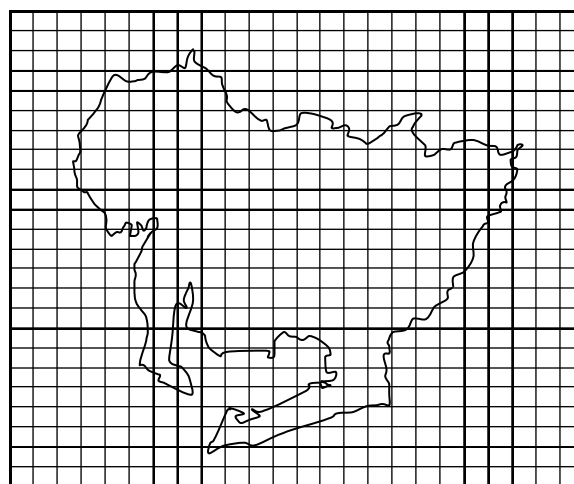
【国内の分布】

本州（関東地方～近畿地方南部）、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

水のきれいな浅いため池に生育する。水田に生育することもあるという。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○		

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

注意して探索している植物の一つであるが、現存を確認できない。水質の汚濁が絶滅の原因と思われる。東海知多のものは、研究者個人の手で栽培条件下で系統保存されている。

【保全上の留意点】

丘陵地のため池に残存している可能性は皆無ではない。注意して更に探索する必要がある。系統保存されているものについては、一刻も早く公的な体制を整備し、将来にわたって保存できるようにすべきである。

【特記事項】

本種は原産地のはっきりしたものが十分な注意のもとに系統保存されているため、厳密には「野生絶滅」である。

【関連文献】

保草本Ⅱ p.47、平草本Ⅱ p.261、SOS 旧版 p.65、環境庁 p.315。
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.120. 文一総合出版, 東京.

ヤナギラン *Chamaenerion angustifolium* (L.) Scop.

【選定理由】

温帯性の植物で、分布域の南限にあたる。愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。茎は直立し、分枝せず、高さ1~1.5mになる。葉は多数互生し、無柄か短い柄があり、葉身は長披針形、長さ5~20cm、幅1~3cm、先端は鋭頭、辺縁はほぼ全縁、裏面は粉白色をおびる。花期は6~8月、茎の先端に長さ10~45cmの総状花序をつくり、多数の花をつける。花は紅紫色、花弁は4枚で倒卵形、長さ1.3~1.7cm、幅6~8mm、小花柄は長さ5~15mmである。果実は線形で、長さ5~8cm、熟すと裂開し、種子は長さ約1mm、長い白毛がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根(茶臼山, 鳥居喜一 19020, 1952-9-20, HNSM)と設楽西部(段嶺村段戸山, 鳥居喜一 2054, 1952-8-2, HNSM)で採集された標本がある。現在も豊根(萩太郎山の野草園)で見られるが、これは人為的に播種されたものである。

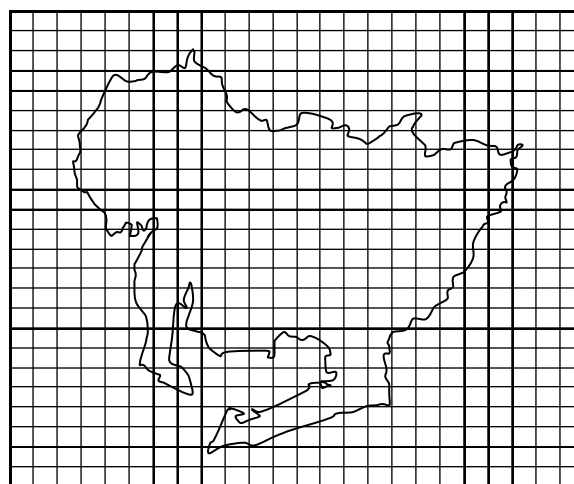
【国内の分布】

北海道、本州(中部地方以北)に生育する。長野県まで行けば、普通に見られる植物である。

【世界の分布】

ヨーロッパ、アジア、北アメリカに広く分布する。

関連地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の林縁や草地に生育する。しばしば伐採跡地などに大きな群落を作る。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

もともと攪乱跡地などに生育する植物であり、遷移の進行によって絶滅したのではないかと思われる。種子は風散布なのでそのうちに再度出現する可能性はあるが、多量に播種されてしまったので、自然に分布を拡大してきたものがあってもはや識別は不可能である。

【保全上の留意点】

現在萩太郎山にあるものは生物多様性という観点からは保全の対象とならず、むしろ除去が望ましい。自然環境下への播種・植栽は、その場所に生育している他の植物に悪影響を与えるだけでなく、将来の分布自然拡大による生物多様性増加の可能性も奪ってしまう。このような付け加えは、善意から出たものであっても、自然に対する大きな脅威となる行為であることを忘れてはならない。

【特記事項】

アカバナ属 *Epilobium* として扱われることも多い。

【関連文献】

保草本Ⅱp.38、平草本Ⅱp.266、SOS旧版p.66。

ヌマゼリ *Sium suave* Walter subsp. *nipponicum* (Maxim.) Sugim.

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい低湿地性植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。茎は中空でよく分枝し、高さ60～100cmになる。葉は互生し、長い柄があり、単羽状複葉、小葉は3～4対で狭卵形～広披針形、長さ3～10cm、幅1～2cm、辺縁に鋸歯があり、無毛で無柄、上部のものは次第に小さく、しばしば3出葉になる。花期は7～9月、花序は複散形で枝の先端につき、花は白色で小さい三角形のがく歯片がある。果実は倒卵形で、長さ3～3.5mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋北部（岩田町，恒川敏雄 1647, 1951-9-23, TMNH；牛川町，恒川敏雄 3846, 1953-8-23, TMNH）で採集された標本がある。

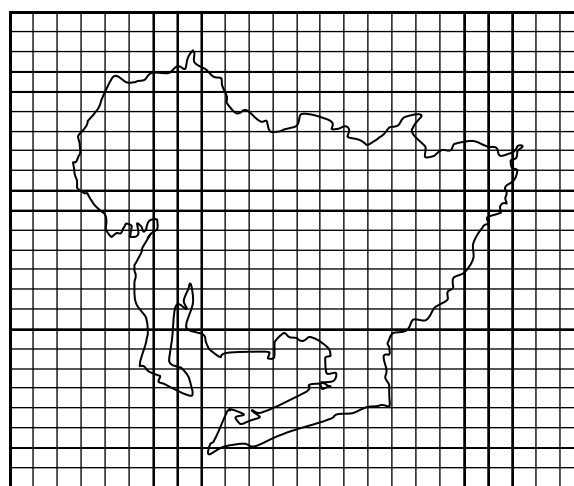
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に生育する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸東北部に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

ため池の周辺などの低湿地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地		○		
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

記録がなく、詳細は不明である。開発と水の汚れにより絶滅したものと思われる。岩田町の自生地は現在では公園として整備され、水の汚染も進んでおり、残存は全く期待できない。

【保全上の留意点】

渥美半島のため池の岸を更に探索する必要があるが、大型の植物だけに、再発見できる可能性は低い。

【特記事項】

サワゼリとも呼ばれる。基準亜種トウヌマゼリは小葉が多く3～8対あり、がく歯片が短く目立たないもので、東北日本のほか北半球に広く分布する。

【関連文献】

保草本Ⅱp.15、平草本Ⅱp.293、環境庁 p.320。

ミツガシワ *Menyanthes trifoliata* L.

【選定理由】

亜寒帯性の植物で、愛知県では寒冷期の遺存植物である。過去に生育していたらしいが、現存は確認できない。

【形態】

多年生草本。根茎は太くはう。葉は束生し、長い柄があり、その基部は鞘となる。葉身は3小葉からなり、小葉は卵状楕円形または菱状楕円形、長さ4~8cm、幅2~5cm、先端は鈍頭、辺縁は細鋸歯があるか、ほとんど全縁である。花期は4~8月、花茎は高さ20~40cmになり、先端に総状に近い細い円錐花序をつける。花は長さ5~15mmの柄があり、花冠は白色、直径10~15mm、5裂し、裂片は3角状卵形で内面に毛がある。蒴果は球形で、直径5~7mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

日進長久手（長久手町）に生育していたという。

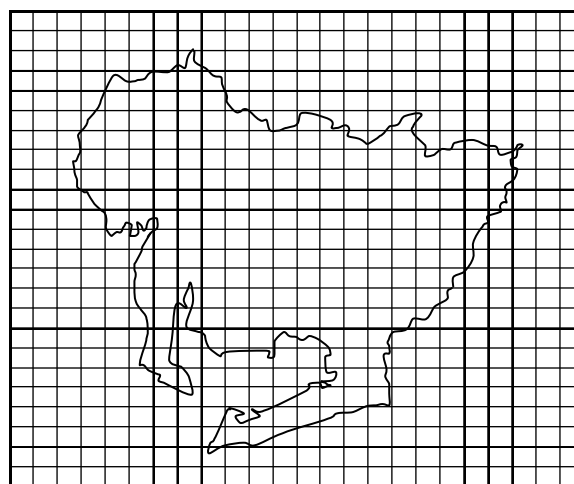
【国内の分布】

北海道、本州、九州に生育する。

【世界の分布】

ユーラシア、北アメリカ北部に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

浅い池沼に生育する挺水植物である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○		

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

本種が生育していたという場所は、開発によって完全に破壊されている。この場所のものという栽培品を見たことがあるので絶滅種としてリストに掲載したが、確実な標本資料は残されていない。

【保全上の留意点】

再発見できる可能性は、ほとんどないと思われる。春日井市の少年自然の家構内の池に半自生状に生育しているが、これは植栽されたものである。

【特記事項】

本来ならば、確実な標本資料の裏付けがない植物は愛知県産のリストから除外し、レッドデータブックにも掲載するべきでない。しかし、愛知県では公的な標本の保管体制が整備されていないという事情があるため、本種も絶滅種としておく。

【関連文献】

保草本 I p.214、平草本 III p.37、SOS 旧版 p.71。
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.140. 文一総合出版, 東京.

マメダオシ *Cuscuta australis* R.Br.

【選定理由】

減少傾向の著しい寄生植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

1年生でつる性の寄生植物。茎は細く糸状で黄色を帯び、寄主にからみつく。茎上には薄膜質で卵形の鱗片葉がある。花期は7～10月、花は無柄で数個が束生し、花冠は長さ約2mmで5裂し、裂片は円頭、筒部内側の鱗片は先端が2裂し、少数の突起がある。がくは低い三角形で薄膜質、長さは花冠の1/2～1/3である。果実は蒴果でほぼ球形、直径約3mm、基部に花冠が残存する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊川宝飯（一宮村東上，鳥居喜一 20684, 1945-9-16, HNSM）で採集された標本がある。

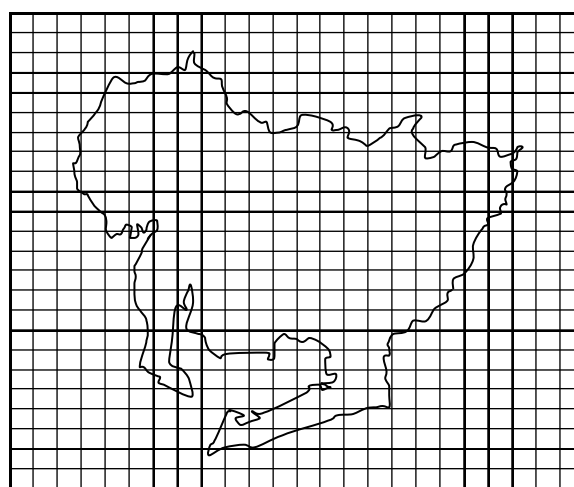
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、中国大陸、東南アジア、オーストラリア。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

日当たりのよい野原などに生育すると言われる。愛知県での生育環境については情報が無い。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩		○	○	
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

「豆倒し」という名から推定すれば、かつては作物の害草になるくらいあったのかもしれないが、残されている資料が少なく、過去の状況はよくわからない。近似種の帰化植物アメリカネナシカズラ *C. pentagona* Engelm. が急増した頃から見られなくなったが、もともと少なかったために紛れてしまったのか、競合により排除されたのかもはっきりしない。

【保全上の留意点】

注意して探索すれば、再発見の可能性は残されている。

【特記事項】

アメリカネナシカズラは、花冠の裂片が鋭頭、筒部内側の鱗片は辺縁がふさ状に裂けるが2裂しない。

【関連文献】

保草本 I p.202、平草本 III p.58。

ハイルリソウ *Omphalodes prolifera* Ohwi

【選定理由】

愛知県の固有種とされている植物で、過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。根出葉は4~5個、倒披針形で長さ12~25cm、幅2.5~4cm、先は急に鋭くとがり、基部は次第に細くなり、全縁である。花茎は根出葉の間から1~3本出て、2~3個の無柄の茎葉があり、花がすむと倒伏する。花は花茎の上部にまばらに4~5個総状につき、苞は1~3個、最下のは花後その腋に芽をつける。花冠は淡紅色で5裂し、直径約1cmである。分果は平滑で直径約2mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸尾張旭（定光寺山，井波一雄 s.n., 1956-5-13 および 1955-6-10~17, TNS）で採集された標本がある。前者が花期、後者が果期の標本で、後者が基準標本である。

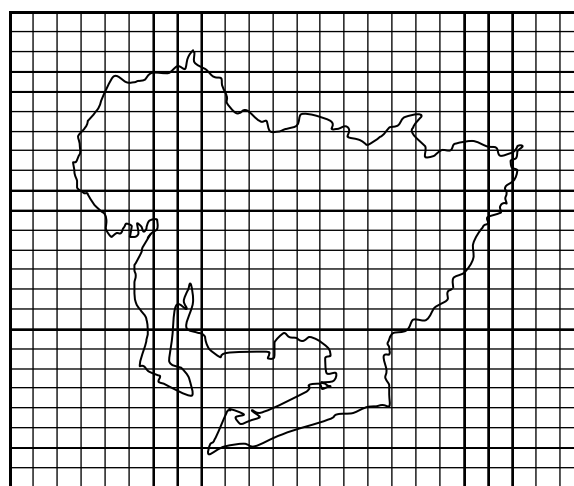
【国内の分布】

一般に愛知県固有種とされているが、井波（1986）によれば広島県にもあるという。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

低山地の沢沿いの林内に生育していたらしいが、詳細は不明である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

豪雨によって生育地の沢が崩壊し絶滅したらしいが、はっきりしたことはよくわからない。

【保全上の留意点】

生育していた場所は特別な地形・地質の場所ではないらしいので、他の場所にもあってよいと思われる。更に注意して探索する必要がある。

【特記事項】

井波一雄氏により愛知県瀬戸市の定光寺付近で発見された植物で、井波氏以外に自生地を見た人がおらず、標本も2点残されているだけで変異の幅がわからない。ヤマルリソウ *O. japonica* (Thunb.) Maxim. と明確に区別できるかどうかも含めて、実体のはっきりしない植物である。2点の標本の写真は、大井（1956）に掲載されている。

【引用文献】

井波一雄, 1986. 広島県植物図選Ⅲ p.73. 博新館, 広島.

大井次郎, 1956. 日本及びその附近の植物について. 国立科学博物館研究報告 3: 98-101.

【関連文献】

平草本Ⅲp.67、SOS旧版 p.75、環境庁 p.166.

タチコゴメグサ *Euphrasia maximowiczii* Wettst.

【選定理由】

小型の草地性植物で、愛知県では生育地も個体数も極めて少なかった。過去に生育していた場所を探索したが、現存が確認できない。

【形態】

1年生草本。茎は少数の枝を出して直立し、高さ15～30cmになり、曲がった毛がある。葉は対生し、ほとんど無柄、葉身は卵円形で長さ6～10mm、幅4～8mm、基部は切形状の円形、両面とも無毛、辺縁には4～7対の鋭くとがった鋸歯がある。花期は8～9月、花は上部の葉腋に1個ずつつき、花冠は唇形、上唇の先まで長さ6～7mm、下唇は上唇とほぼ同長、白色で紫色の条がある。蒴果は長楕円形で長さ4～5mm、中に十数個の種子がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽西部（碁盤石山，小林 40483，1986-8-9）に生育していた。

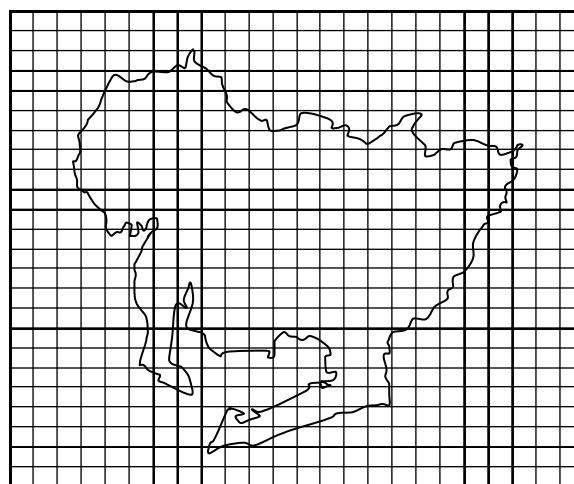
【国内の分布】

本州（東北地方南部～近畿地方、中国地方西部）、四国西部、九州中北部に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の日あたりのよい草地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

1カ所にごく少数の株が生育していたという。このあたりという場所を何人かで探索してみたが、確認できなかった。遷移の進行により大型の草本が多くなり、絶滅したのではないかとと思われる。

【保全上の留意点】

地域共同の採草地として利用されてきた山地の草地（カヤ場）は、利用の停止によって森林化が進み、全国的にも愛知県でもほとんど壊滅状態である。稜線の草地は、防火帯としても眺望を楽しむという点でも重要であり、草刈りや火入れによって維持していく必要がある。

【特記事項】

本属の中では、分布域の広い種である。

【関連文献】

保草本 I p.130、平草本 III p.121。

ゴマノハグサ *Scrophularia buergeriana* Miq.

【選定理由】

草地性の植物で、県内では1カ所に生育していたが、その場所で現存が確認できない。

【形態】

多年生草本。根は太く肥厚し、紡錘形になる。茎は方形で直立し、高さ90~150cmになる。葉は対生し、長さ1~2cmの柄があり、葉身は卵形、長さ6~8cm、幅3~4cm、質はやや厚く、辺縁に多数の鋸歯がある。花期は7~8月、茎の先端に長さ20~40cmの細長い総状花序をつくり、多数の花をつける。がくは5深裂し、裂片は3角状卵形で先はやや鈍頭になる。花冠はつぼ状で黄緑色、長さ6~7mmである。蒴果は卵形、長さ約5mmになる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋北部(富士見岩, 芹沢・芳山 169, 1984-7-27)に生育していた。

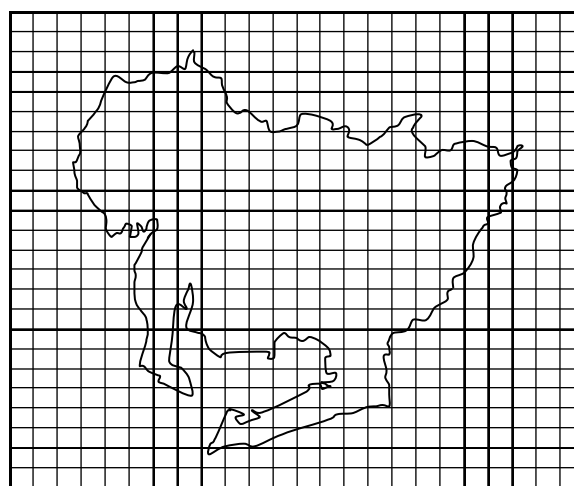
【国内の分布】

本州および九州に生育する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸(北部、東北部)に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

一般に河川敷などの湿った草地に生育するが、愛知県の自生地は低山地の尾根すじの乾いた草地であった。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

個体数はもともと少なかった。草地としての利用が停止され、ネザサや低木が繁茂したことが絶滅の要因である。

【保全上の留意点】

現地での再発見は困難と思われる。

【特記事項】

科名のもとになっているが、全国的に見てもそれほど多くない植物である。標本写真は「自然からのSOS」(SOS新版)に掲載されている。

【関連文献】

保草本 I p.153、平草本Ⅲp.100、SOS旧版 p.80、SOS新版 p.162。

ヒシモドキ *Trapella sinensis* Oliver

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい水草で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存する確実な自生地がない。

【形態】

多年生の浮葉性水草。茎は水中を長く伸びる。葉は対生し、水中のものは細長く披針形、水上のものは長い柄があり、葉身は三角状円形～腎円形、長さ2～3.5cm、幅2.5～4cm、先端は円～鈍頭、基部は開いた浅心形、辺縁には鈍鋸歯がある。花期は7～9月、通常花と閉鎖花があり、閉鎖花は無柄、通常花は葉腋から2cmほどの花柄を伸ばし、水上に淡紅色の花をつける。花冠は筒状で長さ2～2.5cm、横向きに咲き、先は5裂し、裂片は円頭である。

【分布の概要】

【県内の分布】

幸田（坂崎，壁谷祥和 37, 1993-9-18）に生育していた。豊橋北部（大池，鳥居喜一 21607, 1942-8, HNSM）で採集された標本もある。大原（1971）によれば名古屋、西尾、岡崎などにもあったというが、確実な資料は残されていない。最近豊田北西部（吉鶴靖則 s.n.）で生育が確認されたが、栽培品が投入された可能性があり、更に検討が必要である。

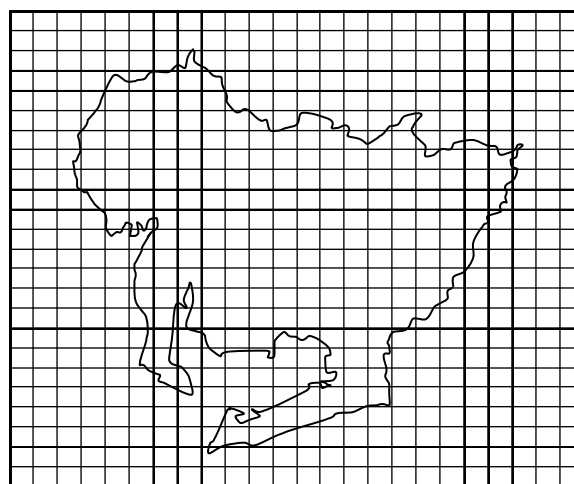
【国内の分布】

本州、四国、九州に生育するが、現存する自生地は全国でも僅かである。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

池沼や水路に生育する。愛知県で現存する生育地は1カ所だけで、その場所は数年前に水質調整用に掘られ、その後使用されないまま放置されてきた小池である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○	○	

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

幸田では小水路に生育していたが、その水路が1994年に改修されて絶滅した。豊橋での状況は不明である。豊田北西部では、数m²の範囲に繁茂しており、果実も多数つけている。通常花は確認できていない。人工的に掘られた池で管理者は特に何もしていないらしいが、同所にサンショウモ、デンジソウ、ホテイアオイ等も生育しているため、何者かによって栽培品が投入された可能性がある。しかし、周辺は水鳥が多い場所であり、自然分布の可能性も皆無ではない。地形的には池沼が成立し難い場所で、昔生育していたものが復活したとは考えにくい。

【保全上の留意点】

豊田北西部の生育地は管理者には意識されており、池自体は当面現状のまま維持されると思われる。しかしこの池にはホテイアオイやヒシも生育しており、それらが繁茂すれば消失する可能性が高い。

【特記事項】

幸田で撮影された写真は、「植物からのSOS」（SOS旧版）に掲載されている。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.112. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

保草本 I p.127、平草本 III p.129、SOS 旧版 p.81 + 図版 22、環境庁 p.175。
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.148. 文一総合出版, 東京.

オオナンバンギセル *Aeginetia sinensis* G.Beck.

【選定理由】

愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

ナンバンギセル *A. indica* L. に似ているが全体にやや大きく、花冠は明るい紅紫色で長さ 3.5～4.5cm、裂片は開出し、直径 2～2.5cm になる。がくは横から見ると楕円形（ナンバンギセルでは通常卵形）で先端は鈍頭、花冠裂の辺縁には細かい歯牙がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根（茶臼山, 山田英吉 426, 1956-8-15）と東栄（振草村小林, 鳥居喜一 21613, 1945-8-4, HNSM）で採集された標本がある。

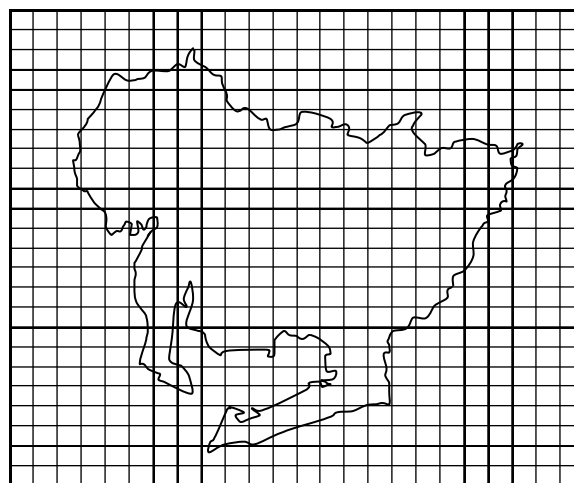
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、中国大陸中部。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の草地に生育し、スゲ類やノガリヤス類に寄生する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

生育状況については情報が無い。おそらくは草地の減少によって絶滅したものと思われる。

【保全上の留意点】

ていねいに探索すれば、再発見の可能性は残されている。

【特記事項】

レッドデータブックあいち 2001 植物編発行後に、愛知県産の標本が確認された種類である。花冠裂片が広く開出するのが特徴である。がくの先端が鈍頭であること、花冠裂片辺縁に小歯牙があることでナンバンギセルと異なるとされることが多いが、これらは必ずしも明確な区別点ではない。

【関連文献】

保草本 I p. 125、平草本 III p. 134。

フサタヌキモ *Utricularia dimorphantha* Makino

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい水草で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生の水草。茎は長さ 50cm くらいになる。葉は互生し、長さ 3~6cm、毛状の裂片に立体的に分裂する。食虫植物であるが、捕虫嚢はわずかにつくだけである。花期は 7~9 月、通常花と閉鎖花があり、閉鎖花は葉腋に単生して短い柄があり、通常花は水上に伸びた高さ 7~15cm の花茎の上部に、3~10 花がつく。花冠は黄色で直径約 1cm、がくは卵状楕円形で長さ約 2mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋北部(名古屋城の堀, 中井三従美 s.n., 1989-8-13) に生育していた。

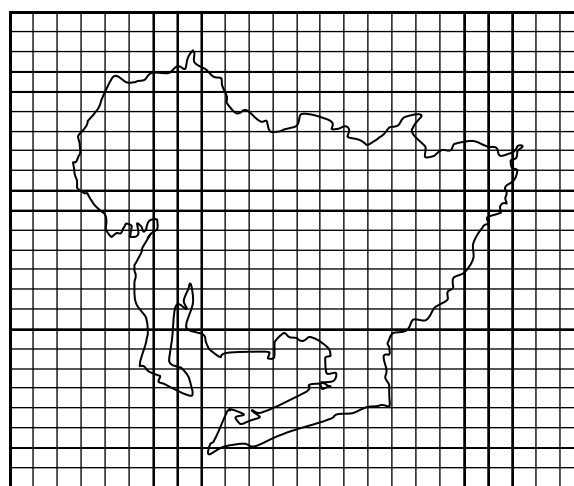
【国内の分布】

本州(東北地方~近畿地方) に分布する。近隣では岐阜県岐阜市金華山岩戸~ダチ目(井波一雄 s.n., 1963-9-15, CBM72562)、三重県木曾岬村(井波一雄 s.n., 1952-10-14, CBM157373) などで採集された標本がある。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

平野部の池沼の水中に浮遊する。現存する生育地は全国でも数カ所にすぎない。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域			○	

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

1989 年に採集された標本があるが、その後見られなくなった。水質の汚濁が絶滅の原因と思われる。全国的には、食虫植物マニアによる採取も深刻と言われている。

【保全上の留意点】

水質が改善されれば、再度出現する可能性もあると思われる。

【特記事項】

他の日本産のタヌキモ類と異なり、通常花のほか、閉鎖花をつける。学名もこの特徴に基づく。標本写真は、「植物からの SOS」(SOS 旧版) p.82 に掲載されている。

【関連文献】

保草本 I p.122、平草本 III p.139、SOS 旧版 p.82、環境庁 p.176。
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.152. 文一総合出版, 東京。

コタヌキモ *Utricularia intermedia* Heyne

【選定理由】

温帯性の水草で、愛知県では既知のすべての自生地で絶滅が確認された。

【形態】

多年生の食虫性水草。茎は泥上をはい、多数の捕虫囊をつけた地中葉で固着する。水中葉は互生して重なり合い、長さ1cm程度、二叉状に分岐して扇形となり、捕虫囊はなく、裂片は幅0.3~0.6mmで辺縁に鋸歯がある。花期は6~9月、高さ5~15cmの花茎を水上に伸ばし、1~5花をつける。花冠は黄色で直径12~15mm、距は前向きで下唇とほぼ同長、がくは長さ約3mmである。秋には茎の先端に直径3~8mmの球状~楕円状の殖芽を作り、越冬する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊川宝飯（一宮町大木、芹沢 54046, 1989-10-29）、田原赤羽根（田原町野田、芹沢 53624, 1989-9-27）、藤岡（深見、芹沢 50082, 1988-10-7）に生育していた。豊橋南部（高師原清水池、鳥居喜一 2054, 1952-8-2, HNSM）、名古屋北部（田代町竹下、井波一雄 s.n., 1937-8-18, CBM233671）、名古屋南東部（天白区八事、浜島繁隆 1078, 1968-8-25）で採集された標本もある。豊橋北部の葦毛湿原には現存するが、これは移入されて繁殖したものであり、保全の対象にならない。

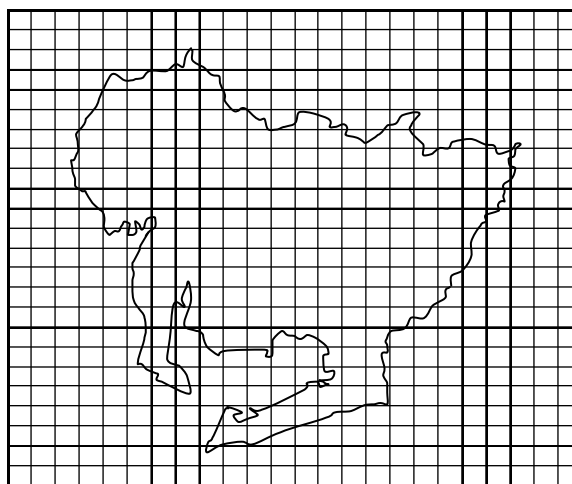
【国内の分布】

北海道、本州（三重県以北）、九州（大分県）に生育する。

【世界の分布】

北半球の温帯に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

浅い池沼に生育する。愛知県の生育地は、いずれも湧水湿地中の浅い水たまりである。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○		

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

3カ所とも、個体数はごく少なかった。田原赤羽根では湿地の上に道路ができて水脈が切れ、藤岡では宅地造成により生育地が破壊されて、絶滅した。

【保全上の留意点】

葦毛湿原のものは、原産地も不明であり、除去が望ましい。新たな自生地が発見される可能性は皆無ではないが、葦毛湿原のような付け加え行為が行われると、発見された自生地が保全に値するかどうか、判断がつかなくなってしまう。湿地はどこも同じではない。ないものは「ない」がその湿地の個性であり、その「ない」という状態を壊す移入は自然破壊行為である。また、愛知県の丘陵地に点在する湧水湿地には、この地域を特徴づける植物が集中して生育しており、その中には絶滅危惧植物も多く、特に優先して保全すべき場所である。湧水湿地の保全のためには、湿地本体だけでなく、湧水を涵養する水源部の地形もあわせて保全する必要がある。また、水源部に森林が発達すると富栄養化が進むので、適宜伐採・搬出を行い、貧栄養状態を維持する必要がある。

【特記事項】

愛知県では、まだ開花は確認されていない。

【関連文献】

保草本 I p.122、平草本III p.139、SOS 旧版 p.83。
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.152. 文一総合出版, 東京.

ヤチシャジン *Adenophora palustris* Kom.

【選定理由】

大陸系の植物で、愛知県では 1 カ所に生育していたが、おそらくは園芸目的の採取により絶滅した。

【形態】

多年生草本。茎は直立し、高さ 60～100cm、紫色をおび、無毛である。茎葉は互生し、無柄、葉身は楕円形～長楕円形で長さ 3～6cm、やや厚く、辺縁に鋸歯がある。花期は 8 月、茎の先端に数個の花を下向きにつける。花柄はごく短く、基部に卵形～広披針形の小苞がある。がく裂片は 5 個あり、卵形で長さ 3～4mm、全縁で開出しない。花冠は漏斗状鐘形で、淡紫色、長さ 1～1.5cm、先端は 5 裂し、花柱はやや突出する。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽西部（納庫，小林 23099，1981-8-16）で採集された標本がある。

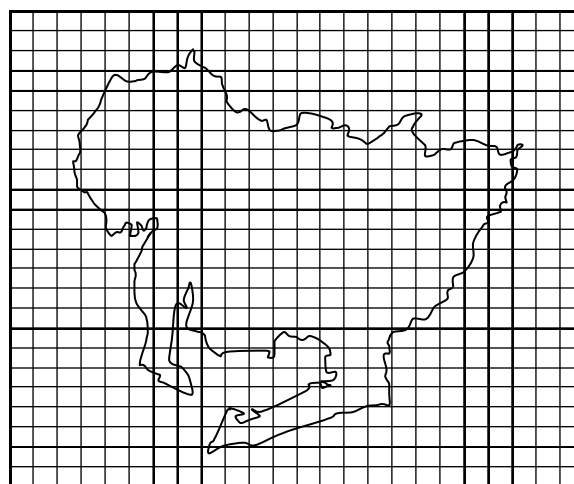
【国内の分布】

本州（愛知県および中国地方）に生育する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸東北部に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山間部の日当たりのよい湿地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地	○			
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

かつては、ある程度の個体数が見られたという。水田化によって生育地が狭められたことに加えて、植生遷移の進行と園芸目的の採取が、絶滅の原因と思われる。

【保全上の留意点】

注意して探索しているが、現地では僅かに残された湿地も最近埋め立てられており、再発見は困難と思われる。再発見された場合、園芸目的の採取を防止するため、分布情報の公表に際し慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

「日本の野生植物」Ⅲ126 図版には、設楽町で 1976 年に撮影された写真が掲載されている。

【関連文献】

保草本 I p.95、平草本Ⅲp.152、SOS 旧版 p.84、環境庁 p.179。

ノギリソウ *Achillea alpina* L.

【選定理由】

草地性の植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。横走する地下茎がある。地上茎は束生し、通常分枝せず、高さ 50～100cm になる。葉は互生し、無柄、葉身は羽状に中～深裂し、長さ 6～10cm、幅 7～15mm、裂片には鋭い鋸歯があり、基部は茎を抱く。花期は 7～9 月、茎の先端に平らな散房花序をつくり、多数の頭花を密生する。頭花は直径 7～9mm、総苞は球鐘形で長さ幅ともに 5mm 内外、総苞片は 2 列に並び、舌状花は 5～7 個、白色で長さ 3.5～4.5mm である。そう果は扁平で長さ約 3mm、冠毛はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽西部（段戸山裏谷，鳥居喜一 23225, 1948-9-4, HNSM）で採集された標本がある。

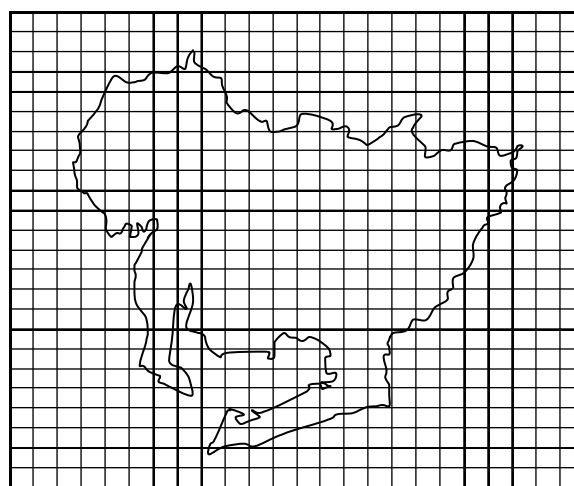
【国内の分布】

北海道および本州に生育する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島南部、中国大陸、ベトナム北部、ネパール、シベリア東部、カムチャッカ、アリューシャン、北アメリカに分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の草地に生育する。愛知県での生育環境については情報が無いが、おそらくそのような場所であったと思われる。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

生育状況については情報が無い。おそらくは草地の減少によって絶滅したものと思われる。

【保全上の留意点】

注意して探索しているが、再発見は困難と思われる。

【特記事項】

北日本に多い植物で、いくつかの亜種・変種に分けられているが、それらの関係については更に検討が必要である。

【関連文献】

保草本 I p.63、平草本 III p.162。

カニコウモリ *Cacalia adenostyloides* (Franch. et Sav.) Matsum.

【選定理由】

温帯性の植物で、愛知県では過去に採集された標本があるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。地下茎は短くはう。地上茎は直立し、通常分枝せず、高さ 60~90cm になるが愛知県のものでは 40cm 程度である。葉は茎の中部に 3~4 個が互生し、翼のない長さ 7~15cm の柄があり、葉身は長さ 7~12cm、幅 10~20cm、先端は尾状鋭尖頭、基部は心形、辺縁に鋭い欠刻状の歯牙がある。花期は 8~9 月、茎の先端に細い円錐花序をつくり、多数の白色の頭花をつける。頭花の総苞は筒状で長さ 8~9mm、総苞片は 3 個、小花は 3~5 個である。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽西部（段嶺村段戸山，鳥居喜一 2058, 1952-8-2, HNSM）で採集された標本がある。

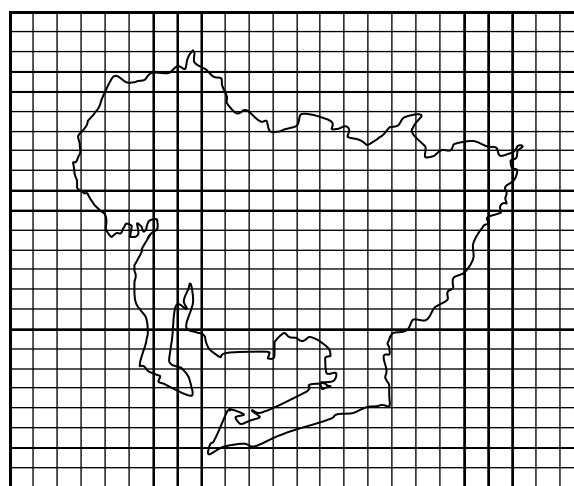
【国内の分布】

本州（近畿地方以北）、四国に分布する。長野県まで行けば、比較的多く見られる種類である。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

落葉広葉樹や常緑針葉樹の林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

沢沿いの林内に生育していたと思われるが、詳細は不明である。自然林の伐採によって絶滅したと推定される。

【保全上の留意点】

段戸山国有林には多くの希少な植物が生育していたが、皆伐により壊滅的な打撃を受けた。今となっては取り返しがつかないことで、この経験を今後の保全施策に生かす必要がある。

【特記事項】

レッドデータブックあいち 2001 植物編発行後に、愛知県産の標本が確認された種類である。標本写真は小林（2006）に掲載されている。

【引用文献】

小林元男, 2006. 北設楽の植物 p.70. 愛知県林業試験推進協議会, 新城.

【関連文献】

保草本 I p.47、平草本 III p.178.

モリアザミ *Cirsium dipsacolepis* (Maxim.) Matsum.

【選定理由】

草地性の植物で、過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。根は太く垂直に伸び、直径 2cm に達する。茎は高さ 50~100cm になる。葉は互生し、下部のものは長柄があり、柄を含めて長さ 15~20cm、葉身は長楕円形または卵形、しばしば羽状に切れ込み、辺縁の鋸歯の先端は鋭い刺となる。花期は 9~10 月、頭花は枝の先端に直立して咲き、総苞は幅 3~4cm、総苞片は長くて開出し、幅 2~3mm である。小花はすべて筒状花、花冠は紅紫色、そう果には長い冠毛がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

稲武（大桑三国山，鳥居喜一 1151, 1956-10-7, HNSM）で採集された標本がある。栽培起源の逸出品と思われるものは現在でも三河山間部の人里近くに稀に見られるが、これらは評価の対象外である。

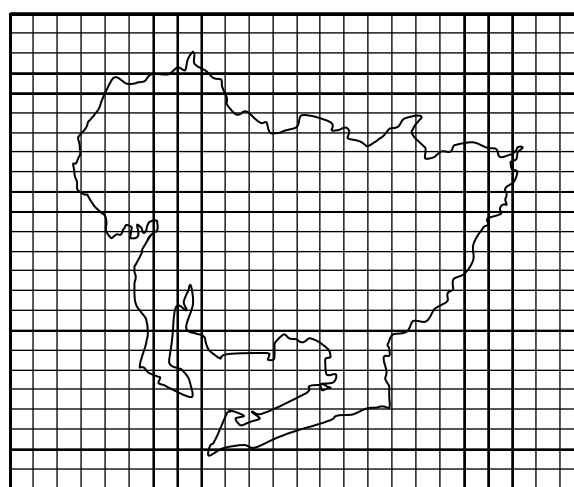
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の日あたりのよい草地に生育する。愛知県の生育地については情報が無いが、尾根のカヤ場であったと思われる。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

草地の減少により絶滅したものと思われる。

【保全上の留意点】

再発見の可能性はあるが、見つかったとしても栽培品が逸出しているため、真の自生かどうか判断が難しい。鳥居氏採集の標本についても、逸出である可能性は完全には否定できない。

【特記事項】

根をヤマゴボウと称し、食用にする。一時期は地域の特産品としてかなり栽培された。

【関連文献】

保草本 I p.37、平草本 III p.217。

フジアザミ *Cirsium purpuratum* (Maxim.)Matsum.

【選定理由】

日本列島で多くの種に分化しているアザミ属の 1 種で、愛知県は分布の南西限である。県内では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

大型の多年生草本。根は太く、食用になる。葉は束生し、花時にも多くの根出葉があり、楕円形で羽状に中～深裂、長さ 50～70cm に達し、先端は鋭頭、基部は次第に細まって柄になり、白いくも毛がある。花期は 8～10 月、花茎は分枝して高さ 50～100cm になり、頭花は枝の先端について下を向いて開き、総苞は扁球形で直径 6.5～8.5cm、総苞片は幅 5～9mm で紫色、縁に小刺針があつて反曲する。小花はすべて筒状花、花冠は紅紫色、そう果には長い冠毛がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

富山（大沼林道、井波一雄 s.n., 1964-9-27, TNS）で採集された標本がある。この標本の写真は長谷川（2005）に掲載されている。鳥居喜一氏によれば、佐久間ダムに水没する前の天竜川の礫の河原にも生育していたそうである。また大原（1984）は、「津具村天狗棚近くの道路脇に 1 株を発見した」と報告している。写真も掲載されており、その写真は確かにフジアザミである。

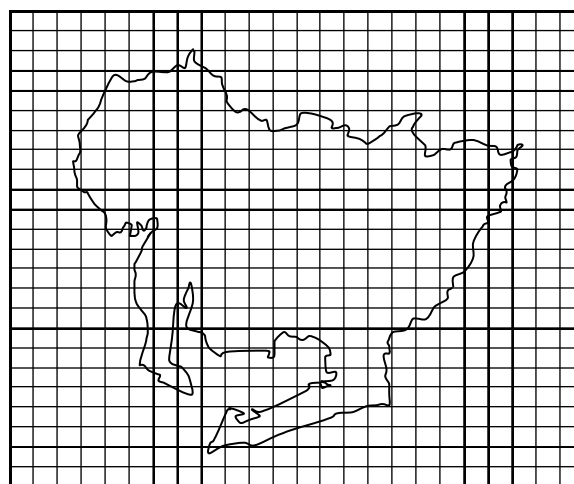
【国内の分布】

本州（関東地方、中部地方）に分布する。富士山の周辺に多い。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の崩壊地や河川敷などに生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

天竜川にどの程度の量があったかは、情報がなく、はっきりしない。佐久間ダムの建設により水没し、絶滅したらしい。

【保全上の留意点】

もともとあったという場所は失われているが、隣接する静岡県、長野県内では比較的多い植物なので、津具の記録のように林道の路傍などの攪乱地で再発見される可能性は残されている。

【特記事項】

他のアザミ類とはかなり異なる形態を持つ、特徴的な種である。

【引用文献】

長谷川道明(編), 2005. よみがえれ! 愛知のいきものたち p.81. 豊橋市自然史博物館, 豊橋.
大原準之助, 1984. 植物新分布報告 第 13 報. 植物研究集録 21: 62-66.

【関連文献】

保草本 I p.32、平草本Ⅲp.215、SOS 旧版 p.85。

ヒゴタイ *Echinops setifer* Iljin

【選定理由】

大陸系の植物で、日本では隔離的に分布しており、愛知県は分布域の東限にあたる。県内では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

1回開花性の大型の草本。茎は直立し、多少分枝し、高さ1m内外で、密に白い毛がある。葉は互生し、長い柄があり、葉身は長楕円形で羽状深裂し、長さ15~25cm、辺縁に短い刺針があり、裏面は綿毛におおわれて白色である。花期は8~10月、頭花はり色で1個の筒状花からなり、集まって直径5cm内外の球状で固い花序を作る。各頭花は無柄で、基部に剛毛があり、総苞は長さ14~21mmである。そう果は円柱形、冠毛は互いに合着して冠状となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城（宇利峠，鳥居喜一 6967, 1970-8-2, HNSM）および豊橋北部（石巻馬越初坂，鳥居喜一 23575, 1967-9-24, HNSM）で採集された標本がある。このほか豊根、額田、瀬戸尾張旭などにあったという話も聞くが、資料は残されていない。

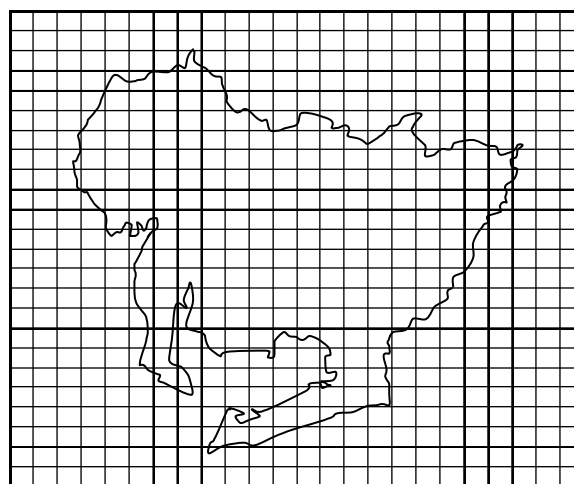
【国内の分布】

本州（愛知県、岐阜県、広島県）および九州中部に隔離的に生育する。

【世界の分布】

日本および朝鮮半島に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

やや乾いた日あたりのよい草地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

故鳥居喜一氏によれば、新城市宇利峠では、採草地として使用されていた時代には盆花にするくらい多かったが、草地利用の停止により植生遷移が進行し、絶滅したという。

【保全上の留意点】

注意して探索しているが、草地の残存状況から判断して、再発見は困難と思われる。

【特記事項】

和名は、韓国名に由来すると言われる。九州では、観光目的のために本種の代用品として植栽されたルリタマアザミによる遺伝的汚染が懸念されている。

【関連文献】

保草本 I p.29、平草本 III p.225、SOS 旧版 p.86、環境庁 p.356。

ヤマタバコ *Ligularia angusta* (Nakai) Kitam.

【選定理由】

全国的に見ても希少で、また減少傾向の著しい植物である。愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。茎は束生し、通常分枝せず、高さ1~1.3mになる。根出葉は直立し、長さ15~35cmの柄があり、葉身は卵状長楕円形、長さ17~30cm、幅13~19cm、先端は円頭、基部は切形で葉柄に流れ、両面緑白色、辺縁は波状で、微凸歯を散生する。茎葉はふつう3個、直立し、下部の葉は長楕円形で円頭、基部は茎を抱く。花期は5~6月、頭花は総状で長さ30cmほどの花序につき、花時横を向き、黄色、長さ5~10mmの柄があり、舌状花は3~4個である。総苞は緑白色で上部は黒色をおび、総苞片は合生して筒状になる。そう果は長さ4.5~6mm、冠毛は長さ葉2mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山（八曾山、井波一雄 s.n., 1961-5-28, CBM70090）で採集された標本がある。図は井波（1971）に掲載されている。

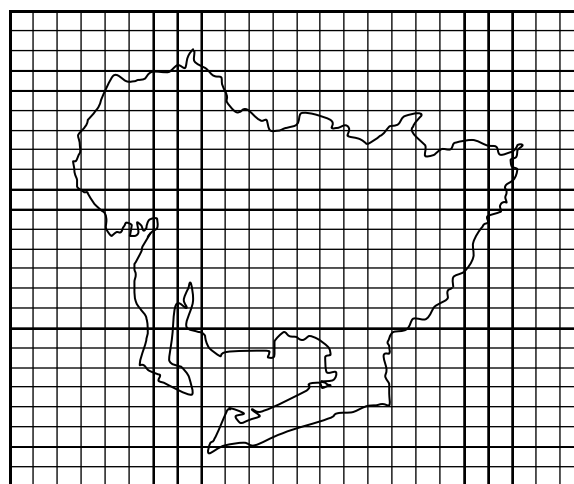
【国内の分布】

本州（関東地方、中部地方）に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山間部の湿った草地に生育する。現存する生育地は全国でも数カ所にすぎない。愛知県での生育環境は不明である。

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

情報がなく、詳細は不明である。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地	○			
水域				

【保全上の留意点】

正確な生育地点は不明なので、あるいはまだ残存しているかもしれない。注意して探索する必要がある。

【特記事項】

どのような植物でも、少なくとも1点はできるだけ完全な標本を作成し、公共の標本室に保管しておくべきである。1株しかない場合どうするかは状況によるが、人間の探索能力には限界があるから本当に1株ということは稀だし、また本当に1株しかないならばそのうちに消滅する可能性が高いから、一般論としては確実な標本資料を残すことを優先する方がよい。もちろん稀少な植物を採集する場合は、それが情報を社会的に共有するための（つまり、自然を私物化しないための）手段であることを意識し、不必要な重複採集を避けると共にできるだけ良好な状態の標本を作成し、またその標本を私蔵せず、速やかに責任ある curator がいる公共の標本室に寄託すべきである。

【引用文献】

井波一雄, 1971. 尾張の植物—高等植物相. 愛知の植物 p.29-47. 愛知県高等学校生物教育研究会, 名古屋.

【関連文献】

保草本 I p.41、平草本 III p.183、SOS 旧版 p.88、環境庁 p.186.

ウミヒルモ *Halophila ovalis* (R.Br.)Hook.f.

【選定理由】

水のきれいな内湾に生育する海産種子植物で、愛知県では過去に採集された標本があるが、現存を確認できない。

【形態】

沈水性で多年生の海産種子植物。根茎は細く横にはい、節から根を出し、長さ3~8mmの透明な鱗片葉を2個ずつつける。鱗片葉の腋には短枝があり、葉を2枚ずつ出す。葉は有柄、葉身は卵形、長さ1~4cm、全縁で、質は薄い。雌雄異株で、2枚の葉の間に苞鞘がつき、苞鞘内にはふつう1個の雄花または雌花ができる。雄花には花柄があり、花被片は3個で楕円形。雌花には花柄がなく、花柱は糸状で長さ約2.5cmになる。果実は卵形で、長さ約4mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美（伊川津，高木典雄 s.n., 1948-9-3）で採集された標本がある。

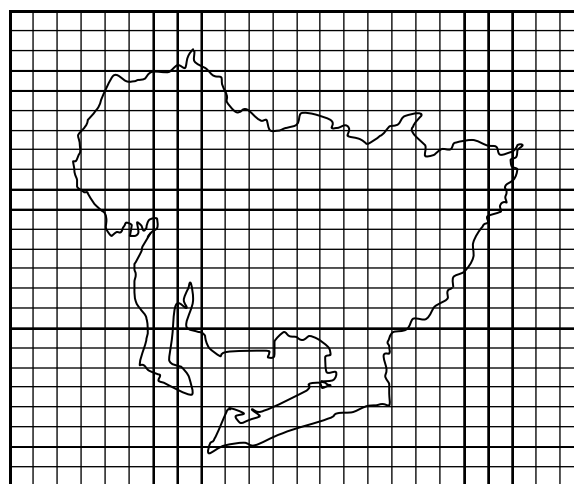
【国内の分布】

本州（中部地方以西）、四国、九州、琉球に生育する。

【世界の分布】

東南アジア、オーストラリアの沿岸に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

砂泥質の海底に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域				○

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

1948年当時もちらほらとあるという程度で、多いものではなかったという。三河湾の汚染により絶滅したものと思われる。

【保全上の留意点】

伊川津周辺の海の様子は、当時とはすっかり変わっている。再発見は困難であろう。

【特記事項】

標本写真は、「植物からのSOS」（SOS旧版）に掲載されている。

【関連文献】

保草本Ⅲp.392、平草本Ⅰp.7、SOS旧版p.89。

センニンモ *Potamogeton maackianus* A.Benn.

【選定理由】

愛知県では過去に採集された標本があるが、現存を確認できない。

【形態】

沈水性で常緑の多年生草本。地下茎は横にはい、節からよく分枝する水中茎を出す。葉は互生し、すべて沈水葉、無柄、葉身は線形、長さ 2~6cm、幅 1.5~4mm、先端は急に細まって凸端となり、辺縁には細かい鋸歯があり、葉脈は 3 本、基部は托葉と合着して長さ 2~6mm の葉鞘となる。花期は 6~8 月であるが、開花することは少ない。殖芽は形成しない。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋北部（石巻小野田町牟呂用水，恒川敏雄 s.n., 1960-6-12, TMNH）と刈谷知立（刈谷市洲原池，浜島繁隆 s.n., 1978-8-19）で採集された標本がある。濃尾平野の県境岐阜県側には、現在も生育している場所がある。

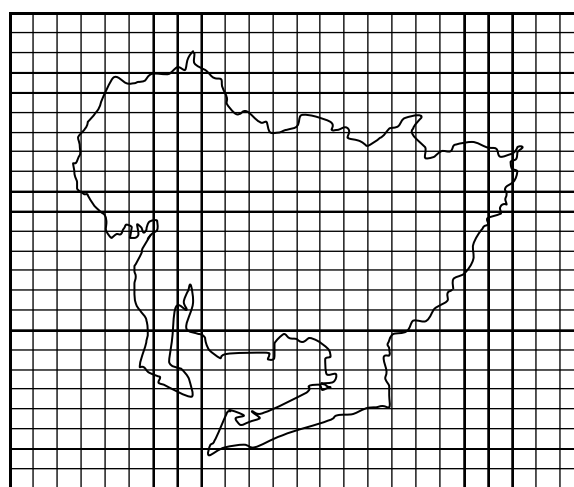
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に生育する。

【世界の分布】

東アジアに分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

湖沼、ため池、河川、水路などに生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○	○	

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

洲原池には多量に生育していたという。絶滅の経緯については、ミスミイの項（74 頁）を参照されたい。

【保全上の留意点】

ミスミイの項で述べたように、一つの開発事業は、玉突き的に他の環境破壊を引き起こすことがある。事業者の直接責任が及ばない間接的な環境影響についても、「未必の故意」が予測されるものについてはしっかりした評価が必要である。洲原池での存続は絶望的であるが、注意して探索すれば、新たな生育地が発見される可能性は残されている。

【特記事項】

リュウノヒゲモと共に、葉の基部が葉鞘になることが特徴である。

【関連文献】

保草本Ⅲ p.417、平草本Ⅰ p.12。
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.56. 文一総合出版, 東京.

イトクズモ *Zannichellia palustris* L. var. *indica* (Cham.) Graebn.

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい水草で、愛知県では 1 カ所に少数個体が生育していたが、その場所が埋め立てられて絶滅した。

【形態】

沈水性の多年生草本。地下茎は細く、底土中を横にはう。水中茎は高さ 20~40cm になる。葉は対生または 3~5 枚が輪生し、線形で長さ 3~6cm、全縁、先端は細く尖る。花期は夏、花は単性で 1 個の雌花と 1 個の雄花が葉腋にならんでつく。果実は長さ 2~3mm の柄があり、本体は三日月形、先端に柄とほぼ同長の残存花柱がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

幡豆（一色町、芹沢 81118, 2006-10-8）に生育していた。

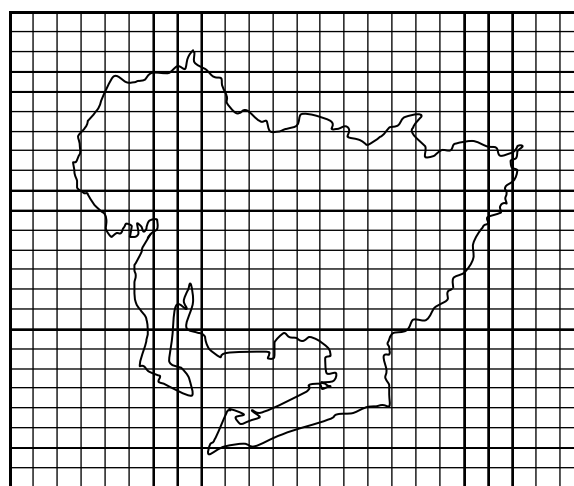
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、琉球に生育する。

【世界の分布】

全世界に広く分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

汽水性の水草で、沿海地の水域に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域				○

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

養魚場跡地の雨水がたまってできた池に、少数個体が生育していた。しかしその池が 2007 年春に埋め立てられたため、少なくともその場所での存続の可能性は失われた。

【保全上の留意点】

注意して探索すれば、他の場所で再発見される可能性は残されている。

【特記事項】

レッドデータブックあいち 2001 植物編発行後に愛知県での生育が確認された種類である。愛知県ではどこかにありそうだなと思いつつなかなか発見できなかった植物の一つで、発見直後に絶滅してしまったのは残念なことである。

【関連文献】

保草本Ⅲ p.408、平草本Ⅰ p.15、環境庁 p.563。
角野康郎, 1994. 日本水草図鑑 p.49. 文一総合出版, 東京.

ヒメユリ *Lilium concolor* Salisb.

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい草地性植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。鱗茎は卵形で高さ 1.5~2cm、鱗片は白色で少数つく。茎は直立し、高さ 30~80cm になる。葉は多数が互生し、無柄、葉身は線形、長さ 5~10cm、幅 5~7mm、先端は鋭頭、葉縁に半円形の微少な突起があり、両面無毛である。花期は 6~7 月、茎の先端に 1~4 個の花を、上向きにつける。花被片は 6 個、朱赤色で濃色の斑点があり、倒披針形、長さ 3~4cm、幅 1~1.5cm、雄ずいは 6 個で斜上し、花粉は赤色、花柱は子房より短い。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美（亀山, M.Shimizu s.n., 1960-6-10, TNS）で採集された標本がある。この標本の写真は長谷川（2005）に掲載されている。「日本の野生植物」I 32 図版には、渥美半島（正確な場所は不明）で 1974 年に撮影された写真が掲載されている。

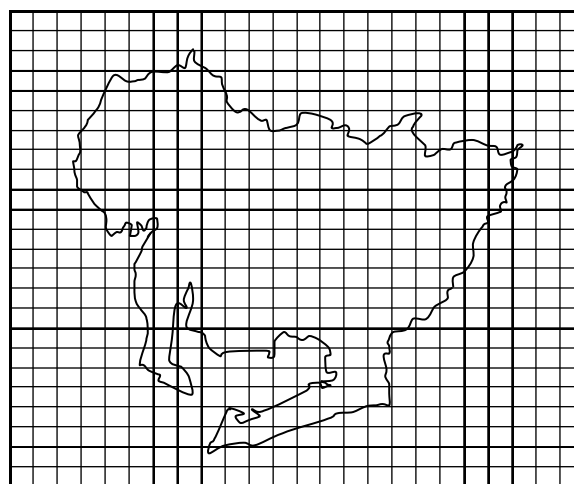
【国内の分布】

本州（東北地方南部以南）、四国、九州に生育するが、稀な植物である。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、アムールに分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

大陸系の草地性植物で、山地の草原に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

個体数はもともと少なかったものと思われる。全国的には園芸目的の採取が深刻であるが、愛知県の場合は生育地の草地の森林化が進行し、絶滅したものと思われる。

【保全上の留意点】

渥美半島の蛇紋岩地は、多くの草地性植物の生育地になっていたが、採草地としての利用の停止に伴い、全体的に森林化が進行している。本種の場合はもはや手遅れで再発見は困難と思われるが、辛うじて残存している他種のためにも草刈りや火入れを行い、草地状態を回復させる必要がある。

【引用文献】

長谷川道明(編), 2005. よみがえれ! 愛知のいきものたち p.81. 豊橋市自然史博物館, 豊橋.

【関連文献】

保草本Ⅲp.127、平草本 I p.40、SOS 旧版 p.94、環境庁 p.370。

ハマオモト *Crinum asiaticum* L. var. *japonicum* Baker

【選定理由】

過去の記録はあるが、真の自生と思われるものは現存を確認できない。逸出して野生状態になったものは点在するが、これらは評価の対象にならない。

【形態】

大型の多年生草本。鱗茎は円柱形で、偽茎状、長さ30~50cm、直径3~7cmになる。根出葉は帯状で、長さ30~70cm、幅4~10cm、辺縁は全縁、やや多肉で光沢がある。花期は7~9月、根出葉の間から高さ50~80cmの太い花茎を出し、その先端に多数の花を散形につける。花序の基部には、2個の長さ6~10cmの総苞がある。花被は白色、下部は細い筒状で長さ5~6cm、上部は6片に分かれ、広線形で長さ7~8.5cm、開いて反り返る。果実は球形で長さ2~2.5cm、数個の大型の種子がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美(恋路が浜)にあったという。おそらく間違いはないと思われるが、確実な資料は残されていない。大原(1971)は産地として幡豆(絶滅)、渥美、赤羽根をあげている。栽培品起源と推定される逸出個体は、豊橋南部、渥美、常滑などで確認されている。

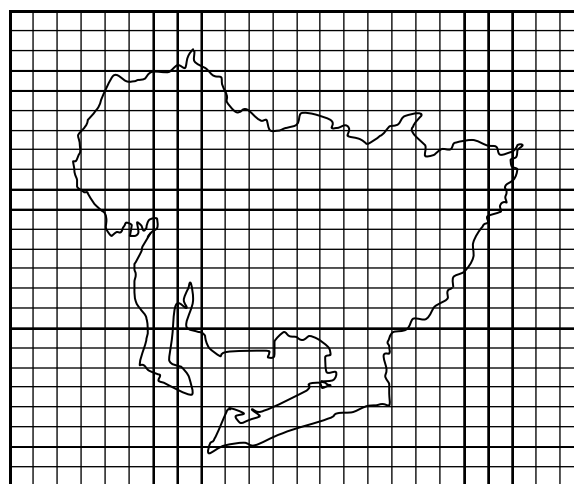
【国内の分布】

本州(関東地方南部以南)、四国、九州、琉球に生育する。

【世界の分布】

日本、台湾、中国大陸、マレーシア、インドに分布する。

関連地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

暖地の海浜の砂地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				○
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

どのくらいの個体数があったかは不明である。園芸目的で持ち去られ、絶滅したらしい。現在は植栽品や栽培品の逸出が多いため、仮に真の自生品が残存していたとしても、あるいは自然に分布を拡大してきたものがあったとしても、もはや識別は不可能である。

【保全上の留意点】

現在恋路が浜にあるものは観光目的の植栽品で、生物多様性という観点からは保全の対象とならず、むしろ除去が望ましい。他の場所に点在しているものも栽培品の逸出である可能性が高く、特に配慮する必要はない。自然環境下への植栽は、その場所にまだ残存している他の植物に悪影響を与えるだけでなく、将来の分布自然拡大による生物多様性増加の可能性も奪ってしまう。このような付け加えは、善意から出たものであっても、自然に対する大きな脅威となる行為であることを忘れてはならない。

【特記事項】

暖地の代表的な海浜植物で、ハマユウとも呼ばれる。ハマユウは浜木綿で、白色の鱗茎に基づくと言われている。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.148. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

保草本Ⅲp.89、平草本Ⅰp.53、SOS旧版p.96。

ビロードキビ *Brachiaria villosa* (Lam.) A. Camus

【選定理由】

暖地性の植物で、愛知県は静岡県と共に分布域の北限にあたる。県内では過去に採集された標本があるが、現存は確認できない。

【形態】

1年生草本。稈は基部で分枝し、高さ15~20cm、全体に開出する軟毛がある。葉は互生し、葉身は長卵形~披針形、長さ3~5cm、幅5~8mm、先端は短くとがり、基部は円形、全面に長短の軟毛があり、葉鞘は節間より短い。花期は8~10月、花序は長さ4~6cm、斜開する長さ2~3cmの枝を6~10個つけ、その枝に小穂が2列に並ぶ。小穂は短い柄があり、長楕円形、長さ2.5~2.7mm、熟して淡黄色、不稔の第一小花と結実する第2小花からなり、芒はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

鳳来北東部（長篠村引地，鳥居喜一 3735, 1955-10-23, HNSM）で採集された標本がある。

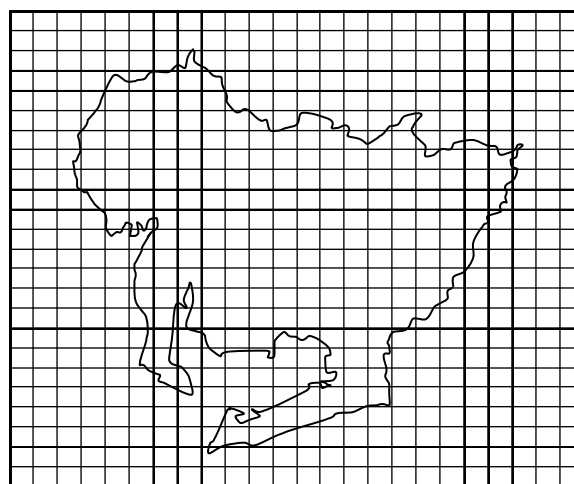
【国内の分布】

本州（静岡県~紀伊半島）、四国、九州、琉球に生育する。

【世界の分布】

日本、台湾、中国大陸中南部、マレーシア、インドなどに分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

熱帯域の雑草で、日本では暖地の海岸近くや川岸の砂地などに生育するが稀である。愛知県の生育地も、豊川の岸であったと思われる。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

情報がない。

【保全上の留意点】

更に注意して探索する必要がある。

【特記事項】

全体に毛が多く、葉縁に小刺針があることが特徴で、和名も毛が多いことによる。

【関連文献】

保草本Ⅲp.366、平草本Ⅰp.97。
長田武正, 1989. 日本イネ科植物図譜 p.578-579. 平凡社, 東京。

トダスゲ *Carex aequalta* Kükenth.

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい低湿地性の植物で、愛知県では過去の記録はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。匍匐枝はなく、株をつくる。茎は高さ 40~80cm、3稜があり、基部の葉鞘は暗褐色になる。葉は細い線形、幅 3~5mm である。果期は 5~6 月、小穂は 3~4 個、茎の上方に集まってつき、頂小穂は雄性、線形で次の側小穂より短く、側小穂は時に先端に少数の雄花をつけるほかは雌性、円柱形で長さ 3~5cm、ほぼ直立する。下方の雌性小穂には短い柄があり、そのため小穂の上端は皆ほぼ同じ高さになる。苞は葉状で、基部は鞘にならない。果胞は卵円形で著しくふくらみ、長さ約 3mm、嘴はごく短い。雌花の柱頭は 2 個である。

【分布の概要】

【県内の分布】

岩倉西春（新川，井波一雄 50, 1930-5-5, CBM134221）で採集された標本がある。井波氏によれば場所は新川町五条川で、エキサイゼリと共に生育していたそうである。

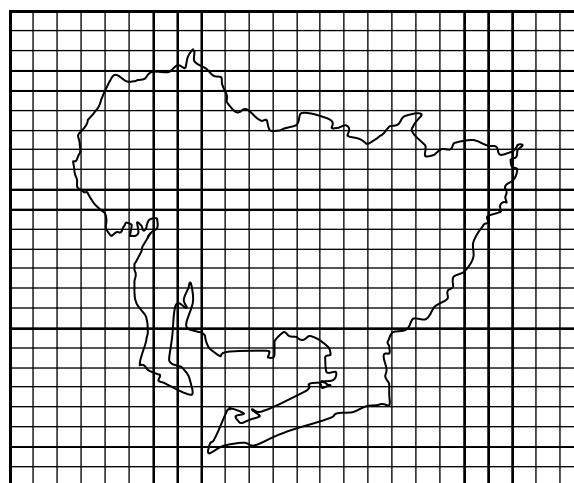
【国内の分布】

本州および九州に生育するが、極めて稀である。

【世界の分布】

日本および中国大陸中部に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

河川敷や池沼の周辺などの低湿地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地			○	
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

かつての生育状況、減少の要因とも、情報が残されていない。おそらくは低湿地の開発により絶滅したと思われる。

【保全上の留意点】

注意して探索する必要があるが、再発見は困難と思われる。

【特記事項】

和名は、発見地である埼玉県戸田に因むものである。このあたりは、都市化が進む前には多くの低湿地性植物が生育していた。

【関連文献】

保草本Ⅲp.303、平草本Ⅰp.163、SOS 旧版 p.104、環境庁 p.214。
吉川純幹, 1960. 日本スゲ属植物図譜 3: 322-323. 北陸の植物の会, 金沢.

アワボスゲ *Carex nipposinica* Ohwi

【選定理由】

愛知県では過去に採集された標本があるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。匍匐枝はなく、小さい株をつくる。茎は高さ30~80cm、3稜があり、基部の葉鞘は暗紫褐色になる。葉は細い線形、幅3~5mmである。果期は4~6月、小穂は3~4個、頂小穂は雄性で線形、長さ1.5~3cm、側小穂は雌性で円柱形、長さ1.5~3cm、直径約5mm、ほぼ直立、最下のはしばしばやや離れてつき、長い柄がある。苞は葉状で、最下のものの基部は長い鞘となる。果胞は卵形で開出し、長さ約3mm、短い嘴がある。雌花の柱頭は3個である。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋北部（萩平，小林 21908，1980-5-25）で採集された標本がある。

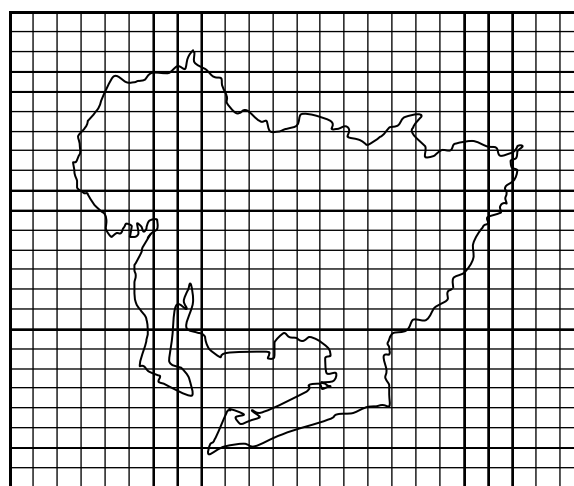
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に生育する。

【世界の分布】

日本、台湾、朝鮮半島、中国大陸。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

平地~低山地の湿った草地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

1カ所に少数の株が生育していたという。絶滅の原因としては、植生遷移の進行、帰化植物の繁茂などが考えられる。

【保全上の留意点】

注意して探索している植物の一つであるが、現存を確認できない。目立たない植物なので、再発見の可能性は残されている。

【特記事項】

ヤワラスゲに似るが、果胞の嘴が短い。和名は、果胞が粟粒に似ているからである。レッドデータブックあいち 2001 植物編や 2008 年版レッドリストではまだ残存している可能性を考慮し CR と評価したが、やはり再発見できないので EX に訂正する。

【関連文献】

保草本Ⅲ p.289、平草本Ⅰ p.151、SOS 旧版 p.104。
勝山輝男, 2005. ネイチャーガイド 日本のスゲ p.330. 文一総合出版, 東京.

ミスミイ *Eleocharis acutangula* (Roxb.)Shult.

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しい暖地性の挺水植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

挺水性の多年生草本。長く横に伸びる地下茎がある。地上茎は節から束生し、直立して高さ 40～80cm、幅 3～4mm、鋭い 3 稜があり、中実で横膜はない。葉は茎の基部について葉鞘のみに退化し、長さ 5～8cm、褐色である。花期は 8～10 月、小穂は茎の先端に 1 個つき、円柱形、長さ 2～3cm、直径 3～4mm、先端は尖り、黄緑色である。鱗片は広卵形、長さ 4～5mm、先端は鈍頭である。果実は倒卵形、長さ 1.5～2mm、不明瞭な 3 稜があり、黄褐色に熟し、表面に格子状の紋がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

刈谷知立（刈谷市小堤西池，奥岡啓子 306, 1987-9-3；同牛池，加藤潤子 146, 1978-7-18）に生育していた。

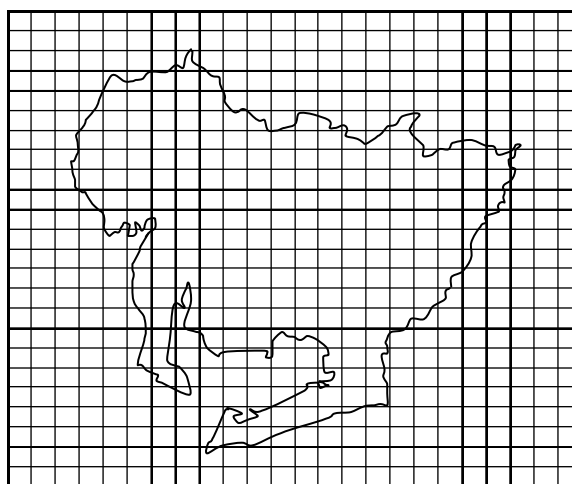
【国内の分布】

本州（千葉県、愛知県、紀伊半島）、四国、九州、琉球にまれに生育する。

【世界の分布】

アジア、オーストラリア、熱帯アメリカに分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

低地の池沼の、浅い水中に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○		

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

2 カ所とも小群落があった。牛池では、大学の統合移転のためにその場所にあった畜舎が移転し、その排水が洲原池に流入して過栄養化が進み、その水が下流の牛池にも流入して絶滅した。小堤西池では、直接的にはカキツバタ保護のため行われたスイレン駆除の巻き添えで絶滅した。

【保全上の留意点】

注意して探索しているが、現在のところ他の場所では発見できない。上の例でも明らかのように、開発行為や保護運動は、玉突き的に他の環境影響を引き起こすことがある。開発に際しては、事業者の直接責任が及ばない間接影響についても、十分な予測と評価が必要である。また保護活動を行う際には、それによって他に影響が出ないか、十分な検討が必要である。小堤西池の場合は、事前調査が行われたにもかかわらず過剰管理の方向に走ってしまったもので、花の美しい特定種だけに目を奪われてはいけないという好例である。この場合、直接的原因となったスイレン駆除は、もとはと言えばスイレンが投入されたことに問題があり、駆除したこと自体は誤りではない。付け加え行為が悪影響を引き起こす例としても、記憶されるべきである。

【特記事項】

標本写真は「自然からの SOS」（SOS 新版）に掲載されている。

【関連文献】

保草本Ⅲp.231、平草本 I p.171、SOS 旧版 p.106、環境庁 p.391、SOS 新版 p.162。

ツクシカンガレイ *Scirpus multisetus* (Hayas. et C.Sato)

【選定理由】

湧水池などに生育する挺水植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

挺水性の多年生草本。地下茎は横にはい、直径約 5mm、1~2cm の間隔で地上茎を出す。地上茎は直立して高さ 40~90cm、鋭い 3 稜がある。葉は 2~3 個が茎の基部について、葉鞘のみに退化する。花期は 8 月、小穂は茎の先端に 1~7 個つき、長卵形、長さ 6~10mm、苞は短く、長さ 1~1.5cm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城(千郷杉山, 鳥居喜一 5857, 1957-8-11, HNSM) で採集された標本がある。

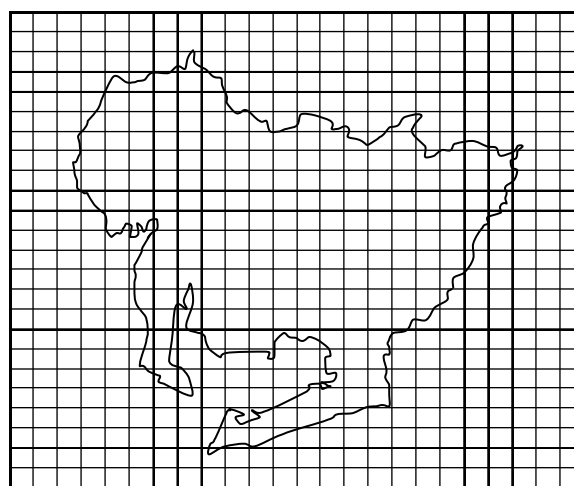
【国内の分布】

本州(愛知県以西) および九州。

【世界の分布】

日本固有種とされているが、東南アジアにも似たものがあるという(筒井, 1984)。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

通常は湧水のある溜池などに生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地				
水域		○		

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

愛知県での生育状況については情報がない。「鳥居喜一氏のご教示では、自生地は宅地開発のために消滅している」と報告されている(筒井, 1984)。

【保全上の留意点】

愛知県のどこかにまだ生育している可能性は残されている。注意して探索する必要がある。

【特記事項】

筒井(1984)により愛知県に産することが報告された種類で、カンガレイに似ているが、地下茎が横にはい、苞が短い。レッドデータブックあいち 2001 植物編には掲載しなかったが、早坂・佐藤(2004)により *Schoenoplectus* 属の新種として記載されたので、絶滅種としてリストに加える。表記の組合せの学名は、正式には発表されていない。

【引用文献】

早坂英介・佐藤千芳, 2004. カヤツリグサ科フトイ属の 1 新種、ツクシカンガレイ(英文). 植物研究雑誌 79: 322-325.
筒井貞雄, 1984. ツクシカンガレイの新産地. 福岡の植物 (10): 213-216.

ヒナラン *Amitostigma gracile* (Blume) Schltr.

【選定理由】

全国的に減少傾向の著しいラン科植物で、愛知県では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。紡錘状に肥厚した根がある。茎は斜上して上部は立ち、高さ5~15cmになる。葉は茎の基部近くに1個つき、長楕円形~広披針形、長さ3~8cm、幅1~2cm、先端は鈍~鋭頭、辺縁は全縁、基部はやや茎を抱く。花期は6~7月、花は茎の上部に一方に偏って10~15個つき、短い柄があり、淡紫色、苞は卵形、長さ3~5mmである。背がく片は楕円形、側がく片は斜卵形、側花弁は斜広卵形で、いずれも長さ2.2~2.5mm、先端は鈍頭、唇弁はくさび形卵形、長さ3.5mm、ほぼ中央で3裂し、中央裂片は幅約1.2mm、先端は円頭、側裂片は長さ約1mm、距は筒状で細く、長さ1~1.5mmである。果実はさく果で楕円形、長さ5~7mmである。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城(加藤等次 s.n., 1963-9-8)、旭(大原準之助 s.n., 1966-6-5)、豊田北西部(岡本英一 280, 1958-5-19)で採集された標本がある。

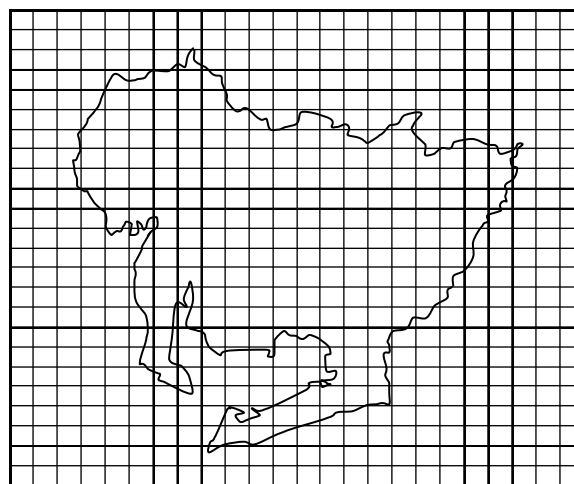
【国内の分布】

本州(茨城県北部および愛知県以西)、四国、九州に生育する。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

山地の林内の岩上に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

情報が残されておらず、よくわからない。

【保全上の留意点】

再発見の可能性は皆無ではない。イワチドリやウチョウランに比べれば花の小さい植物であるが、それでも再発見された場合、園芸目的の採取を防止するため、分布情報の公表に際し慎重な配慮が必要である。

【関連文献】

保草本Ⅲp.12、平草本Ⅰp.201、SOS旧版p.109、環境庁p.394。

カンラン *Cymbidium kanran* Makino

【選定理由】

全国的に危篤状態のラン科植物で、愛知県では過去の記録はあるが、現存を確認できない。

【形態】

常緑性の多年生草本。葉は束生し、広線形で多少湾曲し、長さ20~70cm、幅6~17mm、先端は鋭尖頭、辺縁に微細な鋸歯があり、葉質は革質である。花期は12~1月、花茎は高さ25~60cmで数個の鱗片葉があり、花はその上部にまばらに5~12個つき、紫色を帯びた緑色、苞は膜質で線形、長さ8~30mmである。がく片は開出し、広線形、長さ3~4cm、幅3.5~4.5mm、先端は鋭尖頭、側花弁はがく片よりやや短く、線状披針形である。唇弁は舌状で肉質、側花弁より更に短く、やや3裂し、淡黄色で紫紅色の斑紋があり、中央に2本の隆起条がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

額田(本宮山)と岡崎南部(保母町)にあったと報告されている(大原, 1971, 1984)が、裏付けとなる標本は残されていない。

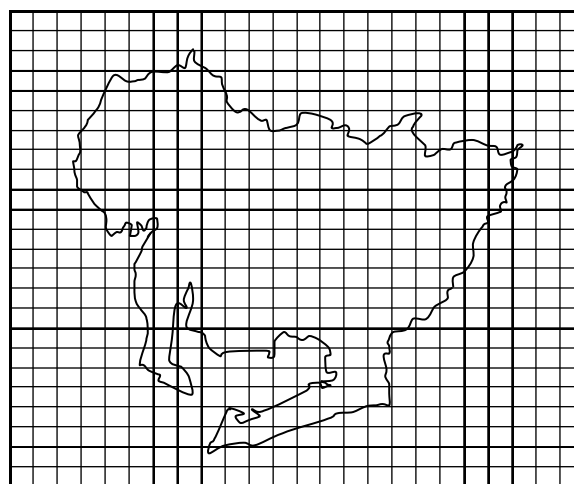
【国内の分布】

本州(東海地方以西)、四国、九州、琉球に生育する。

【世界の分布】

日本および台湾に分布する。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

暖地の山林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○	○		
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

生育状況は記録がなく、不明である。おそらく発見と同時に園芸目的で採取され、絶滅したのではないかと思われる。

【保全上の留意点】

再発見された場合、園芸目的の採取を防止するため、詳細な分布情報は公表を避けるべきである。本種の場合は、再発見されたという情報さえ伏せる方がよいかもしれない。

【特記事項】

昔から園芸の対象として珍重され、最も集中的に採取されてきたランである。どの場所も発見即絶滅に近く、標本資料は全国的にもほとんど残されていない。標本資料で確認できないため本来ならリストから除外すべきであるが、本種の特徴を考えれば、標本がないのはやむを得ないかもしれない。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.150. 名古屋営林局, 名古屋.
大原準之助, 1984. 植物新分布報告(13). 植物研究集録 21: 62-66.

【関連文献】

保草本Ⅲp.65、平草本Ⅰp.229、SOS旧版p.109、環境庁p.232。

オオミズトンボ *Habenaria linearifolia* Maxim.

【選定理由】

温帯性の植物で、愛知県は分布域の南限にあたる。県内では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。楕円形の球茎がある。茎は直立し、高さ 40～60cm になる。葉は茎の下部につき、鞘状のものを除いて数個が互生し、葉身は線形、長さ 10～20cm、幅 3～6mm、先端は細く尖り、基部は茎を抱いて葉鞘となる。上部の葉は小さく、鱗片状となる。花期は 8 月、花は茎の上部に 5～7 個が総状につき、直径 1～1.5cm で白色、苞は鱗片葉に似て、長さ 1～1.5cm である。背がく片は卵形、長さ 6～7mm、側がく片は斜卵形花時に下に曲がり、側花弁は斜 3 角形、背がく片と並んで立つ。唇弁は 3 裂して十字状になり、側裂片は湾曲して下を向き、先端に小歯牙がある。距は下垂し、長さ 2.5～3cm、先端は次第に太くなる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋北部（内藤宇佐彦 659, 1976-8-27）で採集された標本がある。

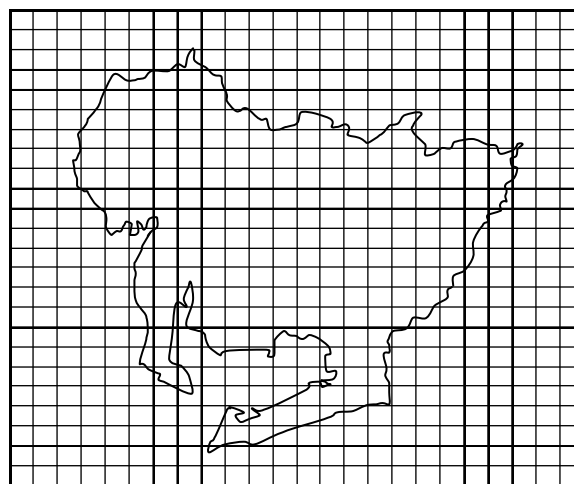
【国内の分布】

北海道、本州（中部地方以北）。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸東北部、アムール、ウスリー。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

日当たりのよい湿地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩				
湿地		○		
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

個体数はもともと少なかったらしい。生育していた湿地が消失して絶滅した。

【保全上の留意点】

既知の生育地での再発見はほとんど期待できないが、県内の他の場所で新たな生育地が発見される可能性はある。再発見された場合、園芸目的の採取を防止するため、分布情報の公表に際し慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

ミズトンボ（493 頁）と比較して花は白色、唇弁の側裂片は下を向き、距が長い。愛知県産のもの写真は「自然からの SOS」（SOS 新版）に掲載されている。

【関連文献】

保草本Ⅲp.8、平草本Ⅰp.193、環境庁 p.406、SOS 新版 p.162。

ムカゴソウ *Herminium lanceum* (Thunb.) Vuijk var. *longicrura* (Wright) H.Hara

【選定理由】

湿った草地に生育するラン科植物で、県内では過去に採集された標本はあるが、現存を確認できない。

【形態】

多年生草本。楕円形の球茎がある。茎は直立し、高さ 20～45cm になる。葉は茎の下部につき、葉身は線形、長さ 8～20cm、幅 5～10mm、先端は尖り、基部は茎を抱いて葉鞘となる。花期は 7～8 月、花は茎の上部に多数穂状につき、淡緑色、苞は卵状三角形である。がく片は長楕円形、長さ 2～2.5mm、側花弁は線状披針形でがく片よりやや短い。唇弁は長さ 6～8mm、中部まで 3 裂し、側裂片は線形で長い、中裂片はごく短い。距はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

稲橋ヨリ田口ノ間（おそらく設楽西部、伊藤篤太郎 s.n., 1891-10-23, TNS）、鳳来南部（黄柳野、井波一雄 s.n., 1943-9-26, CBM 264614）、御津（御津村、S.Murata 1953, 1928-7-6, TNS）、幸田（三ヶ根山、井波一雄 s.n., 1953-7-23, CBM70487）で採集された標本がある。大原（1971）は産地として津具、蒲郡をあげている。

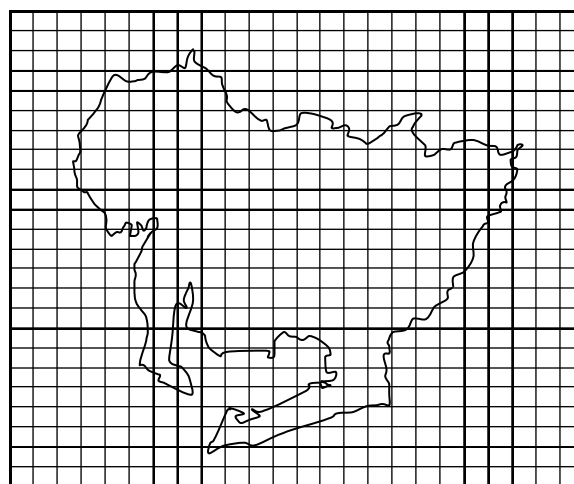
【国内の分布】

北海道（西南部）、本州、四国、九州、琉球。

【世界の分布】

日本、台湾、朝鮮半島、中国大陸東北部。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

通常は湿った草地に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林				
草・岩	○			
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

愛知県での生育状況については情報が残されていない。草地の消失によって絶滅したと思われるが、詳細は不明である。

【保全上の留意点】

ていねいに探索すれば再発見の可能性は残されている。再発見された場合、生育地の個別的な保全が必要である。

【特記事項】

2008 年春に公表したレッドリストには掲載されていないが、その後の追加調査で愛知県産の標本が確認された。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.151. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

保草本Ⅲp17、平草本 I p.194.

ツクシサカネラン *Neottia kiusiana* Hashim. et Hatus.

【選定理由】

極めて希少な腐生植物で、愛知県では過去に採集された標本があるが、現存を確認できない。

【形態】

腐生の多年生草本。根茎は縦に伸び、長さ 1.5~2.5cm、多数の根を水平~やや上向きに出す。茎は 1本が直立し、高さ 6~10cm、4~5 個の鱗片葉を互生する。鱗片葉は上のものほど大きく、上部 1~2 個は狭卵形、長さ 1.8~2.5cm、幅約 1cm、鈍頭である。花期は 6 月、花は茎の上半部に 8~10 個つき、最下の 1~2 個は大型の鱗片葉の葉腋につき、他は披針形で長さ 5~7 mm の苞がある。子房はやや卵形にふくらみ、茎とともにまばらに毛がある。がく片は狭卵形、長さ約 3mm、唇弁は広卵形で長さ、幅とも約 6mm、先端は 2 裂し、裂片は長さ、幅とも約 2.5mm、円頭である。

【分布の概要】

【県内の分布】

旭(高木典雄 s.n., 1966-6)で採集された標本がある。採集直後に撮影された写真が、大原(1971)に掲載されている。

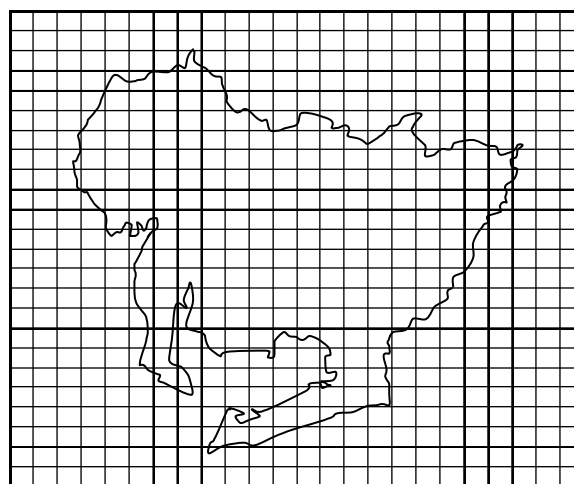
【国内の分布】

既知の産地は九州(鹿児島県北部)である。

【世界の分布】

日本固有種とされているが、朝鮮半島にも似たものがある。

要配慮地区図



【生育地の環境 / 生態的特性】

愛知県の生育地は、標高約 550m の、モミ、カン類、シデ類に植栽のスギをまじえた自然度の高い混交林であった。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【過去の生育状況 / 絶滅の要因】

林内に少数株が生育していたという。現地の状況は特に変化してはいないが、数回探索したにもかかわらず再発見できなかった。林床の全体的な乾燥化が絶滅の原因かもしれない。

【保全上の留意点】

自然度の高い森林は、愛知県では僅かに残存しているだけである。このような森林は、希少種のあるなしに関わらず注意して保全する必要がある。

【特記事項】

とにかく希少な植物で、十分な比較検討ができていないが、おそらくツクシサカネランで間違いないと思われる。大きな鱗片葉が特徴である。再発見された場合、マニアの採取やカメラマン、物見高い自称自然愛好家の踏み荒らしを避けるため、分布情報の公表に際し慎重な配慮が必要である。

【引用文献】

大原準之助, 1971. 愛知県国有林の植物誌 p.178. 名古屋営林局, 名古屋.

【関連文献】

環境庁 p.246、SOS 新版 p.162。

橋本 保・初島住彦, 1991. サカネラン属の新種. 筑波実験植物園研究報告 10: 41-44.